

機動私兵クロニクル

放置アフロ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

戦争は終わった。箱に封印されたラプラスの魔物は解放され、世界に欺瞞と憎悪をもたらした。紛争が始まる。

UC・0097。生き残った強化人間を巡る復讐の幕開け。

UC・0098。木星からやってきた災厄。

UC・0099。そして、終幕は環月危機（ムーンクライシス）へ。

目次

一章 UC・0097

キキ・ロジータの仕返し（前編）	1
キキ・ロジータの仕返し（後編）	13
マリーダ・クルスの思い出	24
ポケットの中の戦争ごっこ（前編）	31
ポケットの中の戦争ごっこ（後編）	41
ほつれた袖（前編）	52
ほつれた袖（後編）	64
あるプルの逆行夢	79

一章 UC・0097 キキ・ロジータの仕返し（前編）

UC・0097年、8月。東南アジア、ラオス山中。バルク村より北東20キロの地点。

ふたりの視線の先、およそ2キロの距離を隔てて、岩山に船が座礁していた。ただの船ではない。白亜の船体にミノフスキー・クラフト・システムを内蔵し、大気圏内を海原を進むように飛行できる。

雲と朝霧が混ざり、ときおりその巨体を抱きかかえていた。

「偽装^{カムフラージュ}されてるガ、ワタシのデータベースは65%の確立でペガサス級揚陸艦グレイファントムと適合している」

女の口から出たのは電子音声だった。

「ブ、ブーっ！ 惜しいですが違いますね。ゲルクさんの頭にあるデータ、最後まで確認してみてください」

答えるのは、声変わりする前の少年に聞こえる。

「『グレイファントムは83年のデラーズ紛争における核攻撃で大破。翌年、廃艦処分』カ。ではアノ船はなんだ？」

「ホワイトベース級機動戦艦、その3番艦セントールですね。レア物ですよ」

「確かカ、モシエ？」

「『第一次ネオ・ジオン戦争の後、残党掃討のために地上へ降下。93年、アジアで作戦行動中に消息を絶つ』と。ぼくの内部記憶^{データベース}は95%の確立だ、ついでつてますね」

岩の頂に腰かけた青年モシエは単眼鏡を外し、隣の岩に立つ彼女を見上げる。長身の女、ゲルクに向け、ふわっ、と笑う。ショートボブから伸びたモシエのみあげが、風に黒く揺れた。

子供っぽさと中性的雰囲気漂わせるモシエの必殺技も、しかし、女に通用しているのかわからない。

異様であった。

彼女、ゲルクの頭部はチタン・セラミック複合材の球体で覆われて

いた。目に当たる部分はごく細く水平にスリットが入っている。ときおり、内部でチカチカと人工的な光が点いては消えていた。

つや消し黒の表面処理は見る者に、硬く、不気味な印象を与えていた。黒い仏像の顔、その上半分といえれば思い描きやすいだろうか。

もつとも、モシエはサイボーグの異形も気にかけている様子はない。相変わらず、にこにこことゲルクを見上げている。

「しかし、正体が何にせよ、アレがジオン残党のネグラになっているというのハ、笑えない状況だ。時に現実は冗談よりタチが悪いナ」

昨年勃発した第三次ネオ・ジオン戦争で、この山間部を飛行するサブ・フライト・システム、―モビルスーツの移動補助を主目的とした航空機―が目撃されていた。そのゲリラが座礁した船に潜んでいる可能性が高い。

モシエとゲルクは民間軍事警備会社に所属し、ある事情でジオン残党を掃討しなければならぬ事態になっていた。

麓に下りると、連邦軍から貸し与えられたホバー・トラック、そして2体の巨人が膝を折り曲げて駐機されている。

「にしても、74式トラックは骨董品だよ。ま、MSもどっこいだけどさ」

ため息しつつも、モシエの黒目は輝いている。瞳に鮮やかなディーブ・ブルーの機体が映り込んでいた。

「ブルー・ヘイズル1号機かぁ……やっぱり、ガンダム頭は趣味的だなあ」

確かにガンダムではある。だが、伝説のRX―78ではなく、余剰パーツで組み上げられた陸戦型ガンダムである。

「なのに、ヘイズルって呼ばれるなんて」

「ヘイズルとは確か、テイターンズの試験部隊が『敵に与える心理効果の研究』で、ジムにガンダムヘッドを搭載した機体の事だろう？ コイツは傍流とはいえ、ガンダムであることに違いはない」

モシエが『待ってました！』と言わんばかりの顔になった。

「その通りです！ ただこの機体、一年戦争中はジムヘッドだったんです」

「ナゼ、そんなややこしいコトをすル？」

「ぼくも詳しくは知りません。戦闘で破損して予備パーツがなかったのかも。」

気になるのが、このRX-79XX-1って型式は連邦軍も存在を否定してまして、マニアの間でも長年の議論の対象になってるんですよ。ひよつとすると、終戦間に旧サイド6で破壊されたRX-78NT-1かな、とも思いましたがあれは試験的にオール・ビュー・モニターを採用されていたので違いますし。他にもRX-78XXっていう機体ですね、ゴビ砂漠の……。」

「オイ、ソノ話長いのか？」

仏像の無表情と冷たい電子音声、突っ走るモシエを制動する。おたくには辛い。

「えと、……すいません。」

で、このブルー・ヘイズル1号機はキャリホルニア・ベース攻略戦で大破して、倉庫にほったらかしにされてたんです。それがグリプス戦役後、ネオ・ジオン侵攻への備えで二線級配備されることになったんですが……。大変だったみたいです。他の陸ガンからパーツを取っ替え引っ換え、何とか一機組み上げたんです」

「ソレがコイツか？」

「はい。元はガンダムなのに、ジム頭だったからガンダムに戻っても、ヘイズルって呼ばれるわけです」

「なるほどナ。『英雄の子、日陰に追いやられ雑兵として死シ、軍神になりて転生するも、偽りの烙印を押しされル』と言ったところカ」

「うわー、なんですか！ 詩人ですね」

「おしゃべりは終いだ。始めよう」

モシエはブルー・ヘイズルの昇降ワイヤーに足をかけ、ゲルクはもう一機、カーキ色に塗られたジムIIへ向かう。

このジムも基地司令のガンダムに対する憧れなのだろうか、V字アンテナを装備した頭部だった。しかし、ガンダムは連邦軍の力の象徴でもある。頭部とはいえ、いや頭部だからこそ、簡単に量産型に付けられるものではない。

V字アンテナは通常型ジムヘッドに飾りとして、無理やり取り付けられている。

「コッチはまるで『オオカミの皮をカブリそこなったヒツジ』だ」
ジムはヘイズルⅡ2号機と呼ばれていた。

「キキサーン、ありがとー。戦闘が始まるから隠れといてねー」

モシエはブルー・ヘイズルを起こしながら、眼下の少女に叫ぶ。

「わかってるよ！ ジオンの一つ目なんかさっさとやっつけてよね」

地面に立つ16、17歳くらいの娘が、こまつしやくれた感じで答え返す。バンダナでアツプにした銀髪が風に揺れていた。

「帰りは村に寄るんだろー！」

モシエを見る彼女の黒目は、先ほどMSを語っていたモシエと同様輝いていた。

「時間があつたら、ね」

黒髪を手でかきながら、モシエは隠れるようにコクピット・ハッチを閉じた。

完全に密閉された空間が暗くなると、無線の呼び出しランプが光っていた。

「あれは惚れられたな、モシエ君よ」

「イケメンの辛いところだなあ。もげろよ」

ホバー・トラックの支援要員、ステイブとルイスだ。

「実はぼくもまんざらじゃないんですよ、へへ」

モシエもよだれを垂らしそうな声で答える。

が、

「ただ、・・・」

ふと、口をつぐんだ。

連邦軍基地から東に直線距離で50キロ、バルク村はあつた。モシエらは村人に協力を頼み、ゲリラの潜伏地点と思われる山までの道案内をもらうことになった。

その案内人があの娘である。

「ちらつ、としか見てないんですが、見送りに来てたあの娘のオヤジさ

ん、すごい目付きでしたよ」

父親の憎悪と怒りがモシエに対するものなのか、あるいは搭乗するガンダムか、あるいは連邦の私兵PMS Cなのかはわからない。

「ケンカしたら相手が『片足の東洋人イェロー』でも、勝てそうにないですね」
父親には右足がなかった。

*

ウォンゼイチットという名は言いにくいし、長つたらしいと思う。村人たちも親しみを込めて私を「オン爺じい」と呼んでくれるし、こっちの方がありがたい。

村に居ついてもう20年近く経つ。

私は独立戦争の第三次降下作戦でマレーシアに降りた。ひどいところだと思った。何度も帰りたいと思った。アジアで最後の便がラサから上がったと聞いたとき、見捨てられたと感じた。

だが、人生の3分の一をここで過ごす、悪くないとも思えてくる。

なにより、ラオスは私にとって先祖の土地だ。不法滞在と罵られようと、テイターンズが弾圧しようと、骨を埋めてやるんだと、肝も座つてくる。

事態が変わったのは、4年前。当時はラサに隕石が落ちた直後で、異常気象がしょっちゅう起きていた。あの日の嵐もそうだ。

衝突音も落雷のひとつだと、村人たちは思った。嵐が過ぎ去って仰天した。村の裏山にでっかい戦艦が座礁してたんだ！

ジオン残党狩りをしていた船が雷にやられて山にぶつかった、と思った。実際は違った。嵐に乗じて反撃に出た残党に落とされたんだ。

やがて、残党軍も村にやってきた。最初こそ村人は警戒していたが、一度テイターンズに焼き討ちされたことがある私たちは、食べ物も事欠く彼らに同情的だった。まあ、よくも連邦艦を沈められたものだ。

それから村人と残党の共同体が作られるのに、時間はいらなかった。

最近、また村人が増えて畑はいくらあっても足りない。今朝も夜明け前から、出ようと思っていたが、霧が濃くて山仕事は遅らせるほかなかった。

ようやく、地面が見えるぐらいになってきたので、家を出る。びつこを引いた足でも、愛機までの道のりは遠くない。

うつすらとした霧越しに、山の稜線と重なるそれが近づく。しばしば思うが、こいつは重機にしてはデカ過ぎる。

「今日も頑張るか、ゴツタン！」

親しみを込めてそのシルエットを呼ぶ。正体は水陸両用MSゴツグの上半身に、自走砲マゼラアタックの車体部を無理付けし、キャタピラ化した「何か」だった。

二人でも動かせるが、開墾作業程度では私一人でやるのがほとんどだ。MS側のコクピットは車体の操縦もできるように改造してあった。

突然、ゴツグタンク後ろの山が動いた！

山の稜線と思ったのは、巨人―モビルスーツ^Sだった。シルエットだけだが、細身の影は連邦軍のものだ。

それはゴツグタンクの丸い頭部を驚掴^{わしづか}みにして揺すり、反動を利用して後ろにひっくり返した。

正面にいたオン爺も巻き上げた泥土をかぶりながら、転ぶ。

「ソコでじつとしてなさい、ポンコツ」

巨人がスピーカーでののしる。女の電子音声は、まるでMSそのものがしゃべっているようだ。でかい脚を高々と上げ、頭上をまたぎ、村の中心へと向かっていった。その後をホバー・トラックが追っている。

いよいよ地響きを立てる足音や、騒ぎ出した家畜が村人に異常を知らせているだろう。

だが、戦える者はほとんどいない。一年前の第三次ネオ・ジオン戦

争で出払ってしまったのだから。帰ってきた者はいない。

いや、ひとりいた。しかし、よそ者だ。彼が乗ってきたMSも整備不良で調子が悪い。

「あの娘たちを奪い返しに来たか」

拳を握るが、ぶるぶると震えるだけで、何もできない。

(ポンコツ……)

先ほどの罵声がよぎった。

独立戦争のときは地雷を喰らって脚を悪くした。

デラーズ紛争はここではなかった。遠すぎた。二度のネオ・ジオン戦争もそうだ。

一年前、ガランシエール隊とかいう、ネオ・ジオン一派の呼びかけにも応えなかった。なぜ、戦わなかった？

脚のせいかな？ 老いたせいかな？ 土地に未練かな？ 命かな？ すべてだろう。

「チクショー！」

不自由な脚に悪態をつき、オン爺はゴッグタンクに向け走る。

*

敵の接近を知り、ゲリラは家を飛び出した。

サブマシンガン、MP71、マシンMG74、連邦から分捕ったM72A1を持つ者もいる。

すべて役に立たなかった。

朝の静寂を突き抜く轟音。ヘイズルII2号機が手にする90ミリマシンガンの掃射。

それはむき出しの土の道に、一列の弾痕をうがってゆく。地上高10メートルから繰り出される火竜の吐息は歩兵はもちろん、あらゆる戦闘車両にとって脅威だった。

「無駄な抵抗はやめなさい。武器を捨て投降しなさい」

お定まりのセリフだが、ゲルクの電子音声で棒読みされると、不気味なプレッシャーがあった。

「さっきと広場に集まれ！ 武器はそこにひとまとめに捨てろっ！
両手は上げておけ！」

ホバー・トラックの車上からは、ガンナーのステイプが6連砲身の
のらみと共に怒声を上げる。20ミリ・バルカン砲でも人間を肉に
するには、十分すぎる威力だ。

赤ん坊を抱いた母親や、敵意を見せる10歳にもならぬ少年、と
いった非戦闘員ばかりで、

「あのキキという娘の言うとおりだった。これで麓の村は制圧。あと
は山腹の厄介な船だけか」

ヘイズルⅡの足元に小山となった銃火器をモニターに見下ろした
ゲルクは、別行動中のモシエを思った。

と、

「後ろから、キャタピラ音！ さっきのMSもどきかよッ！」

オペレータ・ルイスの無線が耳を打つ。

調整されていないキャタピラはガチャガチャとうるさく、ガスター
ビンもうなつてばかりで前進速度は遅々としている。マフラーが吐
く黒煙は、時代錯誤もはなはだしい外燃機関のようだ。

「やる気らしいナ。止まらないと撃ツ」

警告の3.0秒後、ゲルクはトリガーを絞る。マシンガンから巨大
な真鍮色の雨が降り、ゴッグタンクは激しく火花と、装甲片を散らし
ていった。

*

顔を隠すようにしていたアイアン・ネイル巨太な爪に命中、老朽化したいく
つかが弾け落ちたが、ゴッグタンクはそのまま突っ込んでくる。

「さすがゴッグタン、なんともないぜ！」

ゴッグは元々、機雷にも耐えられるほど頑丈にできている。

アイアン・ネイルの隙間から、敵のジムⅡが弾切れを起こして、弾
倉が飛び出すのが見えた。

「せめて一太刀！」

敵機が弾倉交換を終え、マシンガンを構えなおす。

ゴツグタンクが両腕を大きく横に広げた。

まさに、

「よく狙えー!」

と、見せるために。

マシンガンの砲口の動きが止まった。

刹那、デイスチャージャーのスイッチを押す。ゴツグタンク腰部から二条の閃光が奔る。

光の正体はメガ粒子砲ではなく、ただの夜間用H I Dだが、思いがけない目くらましに敵は棒立ちになった。

ようやく、ジムⅡが動き出すと何を思ったか、マシンガンを足元に落とした。

いまさら、降参? 笑わせる!

ゴツグタンクのフレキシブル・ベロウズ・リムを限界まで引くと、高速で突き出した。コクピットなら一撃でつぶせる!

恐れや憎しみを越え、自然に雄叫びを上げていた。

「ジイ——ク! ジ……」

高エネルギー・ミノフスキー粒子の輝きがモニターの正面から、夢のように広がった。

*

ゴツグタンクの頭部の中心、モノアイにはサーベル・グリップが生え、後頭部からピンク色の長大な光刃を見せていた。

ヘイズルⅡはマシンガンを投棄すると、抜く手も見せずにビームサーベル一閃、ゴツグタンクの目を焼き尽くす。

しかし、燃え残ったウオンゼイチツトの意思が乗り移ったかのように、慣性のままゴツグタンクは止まらない。とっさに、ヘイズルⅡはサーベル・グリップを離すと、両手で押しとどめる。

大質量の突進を食い止めるヘイズルⅡの足首までが、泥の地面に沈んだ。

背後の村人たちもどよめきとも、わめきともつかぬ声を上げ、腰を浮かしかける。

「が、がんばれ、オン爺！」

少年が叫ぶ。

残念な結果になった。

ヘイズルⅡは上半身に大きくひねりを加え、ゴツグタンクを横へ投げ転がす。巨大なボディが脇のぼろ家をなぎ倒しながら突っ込んだ。路面の抵抗を失ったキヤタピラが激しく空転し泥を撒き散らす、やがてそれも止まった。

コクピットのゲルクは、ふっ、と鼻で嗤う。

『『ジーク・ジ』なんだって？ ウフフ、『ジ・エンド』カ』

ヘイズルⅡを回頭させると、霧と雲間に見え隠れする機動戦艦を見やり無線を送る。

「モシエ、そちらの調子はどうダ？」

*

「今、頂上に着いたところですよ」

ブルー・ヘイズルⅠ号機は機動戦艦が座礁した側の反対から、ワイヤーガンを使って山を登っていた。

岩肌に張り付きながら、モシエはブルーの左側頭部からシユノーケル・カメラを伸ばし、下をうかがう。目もくらむような光景だが、横たわるセントールがよく見えた。下からは真上を見上げない限り死角になるし、小さなカメラを発見される可能性は低い。

「こちらも片付いた。村人を拘束し次第……」

「戦艦の砲は動かせんのか!？」

「無理ですよ！ 主機も火が入らないのに」

「方向音痴のバロンはどこだ!? 格納庫に呼び出せ！ MSを早く……」

ゲルクとの暗号無線の途中、ジオン残党の会話を受信した。シユノーケル・カメラを素早く格納する。

「ゲルクさん、聞きました？」

「オープン回線とは、連中焦りまくってるナ。だが、待てヨ、モシエ。ワタシが行くまデ……」

「今なら奇襲できます。仕掛けます！」

モシエはフットペダルを踏む。

背部メインスラスタから軽く青い炎を見せ、ブルーが空中に機体を躍らせた。

すぐに自由落下が始まる。

モシエには内臓が上に持ち上げられる感覚も大したことがないのか、口元には笑みすら浮かべている。その目はHUDの高度表示を追った。

下方センサーが障害物を察知し、【衝突警告】を発する。

まだ笑っているモシエは、ホワイトベース級の特徴的な左右カタパルト、その左舷側に狙い定める。

あわや、墜落というところで、フットペダルを床も抜けよ、と踏み抜く。一転して逆方向のGに血が一気に下がり、視界が暗くなる。

常人ならばそのまま失神していた。

ホワイトベース級の左前脚基部にハードランディングしたブルーは逆噴射でも落下速度を殺しきれず、膝のショック・アブソーバーは底突きせんばかりに収縮する。さらに、両手両膝を甲板上につき、ようやく耐える。

立ち上がったブルーは艦橋を見上げ、上半身を反らし仰角を取る。

即、胸部バルカン砲を放つ。威嚇射撃。曳光弾の火線が窓を擦過していった。

砲撃音が木霊となって、尾を引く。

「降伏か死か？ 好きに選べ」

モシエは外部スピーカーで最後通告する。

永遠のような短い時間、オープン回線は沈黙を続けた。

「主は赦してくださいさるだろうか……」

つぶやくモシエが、操縦桿のトリガーに力を込めたとき、

(久シブリデスネ)

気持ち悪いほど生暖かい風が、モシエの精神を揺らしていった。声はコクピットの中から聞こえてきた。

背筋に冷たい汗が浮く。

殺気を感じ取り、機体を回頭させながら無線に問わずにはいられなかった。

「ゲルクさん、何か言いましたっ……!?!」

ブルーの背後、カタパルトの先に巨人がいた。流れた雲が漂う、その中に。

エメラルドの一つ目が燃える。炎刃が陽炎かげろうを見せる。

まとわりつく雲がうっとおしい、とそいつは突撃した。

「マラサイっ!?! いや違うッ、こいつは!」

ハリネズミのように尖った肩。赤熱刀ヒートサーベルを携えた右手。

(……炎ノ精霊サン)

声の余韻の中、紫のMS、イフリート・シユナイドはヒートサーベルを高々と振り上げた。

次の瞬間、うなりを上げてブルーに襲い掛かる!

キキ・ロジータの仕返し（後編）

伏せたブルー・ヘイズル1号機の頭上3メートルを、赤熱刀ヒートサーベルがなぎ払った。

片膝をつきながらブルーは右脚部サーベルラックからグリップをつかむや、即座に伸び上がる。

瞬間形成したミノフスキー粒子の光刃は空くうを下から上に切り裂いた。すでに、イフリート・シユナイドは短い後ろ跳びシヨート・バック・ステップでよけている。

しかし、ブルーが胸部バルカンの照準をつける隙もなく、またイフリートは間合いをつぶす。

ブルーの頭部を狙う袈裟斬りをかろうじて、ビームサーベルが防いだ。

炎刃が生み出す電磁力と光刃のIフィールドが干渉する。バチバチと融解金属を撒き散らし、ブルーとイフリートの装甲に小さい穴がうがつ。

そして、弾けた。衝撃に双方の機体が揺らぐ。

立ち直りはイフリートが、

「速いー！」

モシエは敵パイロットの手腕に舌を卷いた。

まさに、落葉らくようの動き。目で追いきれない。

次々と繰り出される斬撃は火炎竜巻となつて、ブルーを駆逐しようとする。モシエは防戦一方となつた。

「このままじゃ……！」

モシエはシヨート・バック・ステップで距離を取り、射撃戦に持ち込もうとする。

その絶妙なタイミングに、イフリートはシヨルダータックルを喰らわせた。

「あわわわ……」

自機のスラスタ噴射も仇となり、ブルーは派手に吹き飛ぶ。カタパルトの端から落ちかけた。

なんとか踏みとどまり、膝を付いて体勢を整えたとき、イフリートの姿は、

「き、消えた!? どこに」

敵に備え、ビームサーベルを構えなおそうとしたブルーの右手に、グリップがない。どこかへ取り落としていた。

(やられる)

死がそこにいた。思わず、目を閉じる。

モシエの脳内の時間が引き延ばされた。

(いや、まだ私は死ねない!)

見えないなら感じる。この戦場で猛り、剥き出しにした殺意を。ブルー、それを感じ取れ!)

かつ、と目を見開いたモシエは、右側から質量をともなったプレッシャーを察知する。大きく回り込み、右舷カタパルトを蹴ったイフリートが数十メートルの距離を跳躍して肉迫する。ようやく、コクピットに接近警報が反響した。

「間に合えっ!」

ブルーの左脚サーベルラックから予備のグリップが飛び出す。

空中のそれを引っつかむや、ブルーは捨て身の突きを繰り出した。

脇構えのイフリートは両断せんと、必殺の水平斬りを浴びせる。

蒼と紫のシルエットが重なった。

*

一週間後。

ラオス、ヴァンビエン連邦軍基地から東へ30キロ。バルク村への途上。

車列の内、6輪カーゴトラックが泥沼となった水溜りにスタックした。

「またか」

後ろを走る軍用電気自動車エレクトリックの助手席に乗る、地球連邦軍フォルタ大尉はうめく。

泥にまみれた峠道である。移動速度が上がるはずもない。

「なんで副司令の俺がこんなこと、……」

先頭の装輪装甲車に牽引され、ようやくトラックは脱出した。

雨季の晴れ間に辺りは燃えるほどの暑さ、そして萌えるジャングルが発する草熱れが苦しいほどだった。

フォルタは基地司令に命じられ、ゲリラから奪回したとある積荷の回収に向かっていた。

一ヶ月前、基地への搬入物資を載せたトラック隊がゲリラに襲撃された。以前から、神出鬼没を噂されるジオン残党の仕業と思われる。連邦軍も捜索に動いたが、ジャングルに阻まれかんばしくない。

トラック隊は民間の運送業者でその護衛は、ブツホ・セキュリティ・サービスという民間軍事警備会社が担っていた。事件の三日後、緊急アドバイザーが派遣された。ゲルクたちである。

「弊社は保険・補償の観点からモ、人道的見地からモ、連邦軍に全面的に協力します」

ゲルクたちはまずバルク村の村長に接触した。すると、

「ここから西のビア山近くに残党をかくまっている村がある」

と情報を入手した。人質がいるため、強行策には出られない。彼らは独自にゲリラとコンタクトする。それなりの身代金と粘り強い交渉の末、拉致された社員、ドライバーを解放させることに成功した。「積荷は保険屋と相談タ」

人的被害をゼロにとどめたゲルクは笑って、モシエたちに言った。ところが、基地司令からは、

「独力で積荷を奪還してもらいたい」

決め付けられてしまった。基地に戻ると、ご丁寧にモビルスーツ2機とホバー・トラックが用意されていた。

*

「で、今回の積荷はなんだったんです。薬？ 銃？ それと

も、………」

軍用エレカのステアリングを握る軍曹はスケベな笑みを浮かべた。
「当たり前だ」

フォルタ大尉の答えに軍曹は口笛を吹いた。

「にしても、ブツホの連中、なんで積荷をバルク村に一時保管するなんていってるんです?」

「奴ら、『積荷が下痢を起こした』とか、司令にいつてきたらしい」

「へっ、おもしろえや! 連中、俺らのサイドビジネス、上にバラす気じゃないですか?」

「そのつもりなら、基地に運び込んで司令につめよるだろう。そうしないってことは大方、タカリ強請ユスリのたぐいだ。傭兵風情がっ!」

タイヤが巻き上げた泥まじりのツバをフォルタは吐き捨てた。

「それじゃ、………殺やつちまいますか!」

「待て待て。装甲車2台でMS2機とホバー・トラックを相手にできるか。それに今は戦争中じゃない。おおっぴらに暴れられねえよ」

軍曹はそれを聞いて、(なんだ、つまんねーの)と肩をすくめた。気持ちはフォルタも同じである。

しかし、軍曹運転しながらよくしゃべる。

「大尉は一年戦争中もここに派遣されてたんですよね」

「ああ、ラサまで転戦したよ」

「ラサ!? 地獄の『ラサの戦い』ですか?」

「そうさ。山みたいにでかいモビルアーマーが空にふわふわ浮かんでよ、メガ粒子砲の雨が降ってきた」

「よく助かりましたね」

「俺は悪運が強いからよ。負傷して後方に送られてたんだ。原隊のクロフォード大隊なんて地面ごとえぐりとられて全滅さ」。

「そうそう、思い出した! これから行くバルクとかいうチンケな村にも行ったぜ」

「宇宙人をたくさん殺したんすか?」

「ハハ♪ ジオンのくそつたれも殺るには殺ったが、あの村じゃゲリラ狩りだな。『解放軍が来たぞー』って、うれしそうに出てきた村人を

片っ端から、こうやってな」

フォルタは銃を構える形を作って、腕を左右に大きく振った。軍曹の肩にもぶつかる。

「そりゃ、おもしれえ！ 俺ももう少し早く生まれてりやなあ」

「そうそう、屍姦つてのも初めてやったんだよな。」

小娘が逃げやがったんだ。足を撃つて捕まえてよ。ばっこんばっこん入れてたら、そいつ舌を……」

右手の鬱蒼としたジャングルから鳥たちが一斉に飛び立った。

エレカのボンネットが突如膨れ上がる。

車体前部で爆発した地雷はエレカを逆立ちさせ、さらに後ろにひっくり返した。

同時に、先頭の装輪装甲車もジャングルから飛来した有線式重誘導弾が命中し、爆発する。

殿の装甲車が機関砲を森に向けてるや、ブーン、と低いうなりを上げて何か飛来する。それは赤熱短剣。装甲車の砲塔に深々と突き刺さる。爆発はしなかったが車内は文字通り灼熱地獄、乗員は気道熱傷により窒息死した。

前後をふさがれたトラックは逃げるつもりか転回する。が、し損ねて道の下の水田に落ちた。

助手席から吹き飛ばされたフォルタは水溜りに落ちて助かったが、運転手の軍曹は足がペダルに挟まったまま、エレカに押しつぶされていた。

「くそつたれえー！」

フォルタは立ち上がって、逃げる。

が突如、足を払われたかのように転ぶ。遅れて、銃声。

命中したのはマグナムライフル弾。軍用弾ではなく、狩猟用ホローポイントだった。熱した銃弾が一瞬でマッシュルーム化し、運動エネルギーを貫通ではなく、肉体破壊へと導く。

関節を木っ端微塵にしながら、フォルタの右ひざが千切れて飛んだ。

「ぐおお、ぎ、ぎっ、ぎやあああ！！」

人のものとは思えない絶叫がほとばしる。

その叫びを圧倒するガスタービンの咆哮が、森の中から湧き上がった。マゼラベースが水田の泥水を巻き上げながら、フォルタに迫る。マゼラベースは遅いが、ナメクジのように這うフォルタよりは速い。地面に泥と血が入り混じった赤い筋を描きながら、這い逃げる。出血から意識が朦朧としてきた。

その時、甲高い笑い声を聞いた。泥に突っ伏したフォルタは汚い顔を上げる。

少女がいた。

(ほら、もつとがんばんなよ。私があんたに撃たれたときはもつと走ったらろ)

二十歳に満たないだろう。少女がしゃがんでフォルタを見ていた。バンドナで上げられた赤茶っぽい髪が、風もないのに揺れていた。

目が合う。彼女は歯を見せて笑った。その口から、どぼつ、と血があふれる。そして、べろつ、と舌を突き出した。舌は半ばまで切断され、かろうじてぶら下がっていた。

(おかげでこんな風になっちゃってさあ。やになっちゃうよ)

まさに「舌足らず」なのに、はつきりとした言葉は、脳に直接突き込まれている。

フォルタはもう這うのを止め、高熱にうなされたように震えた。

キヤタピラが地響きを上げて迫る。

キュラキュラキュラ。

水田に落ちたトラックを行きかけの駄賃とばかりに轆き粉碎し、マゼラベースは道に至る傾斜を一気に駆け上った。

そして、

キュラキュラキュラー、

断末魔――、

キュラキュラキュラ……。

*

「すごい、400メートルはあった！ ナイスショット、村長さん！」
停車したマゼラベース、運転手用ハッチを開けたモシエは、車上に立つ女に声をかける。隣のゲルクほどではないが、大柄だ。両手に狙撃用ライフル^Pを持っていて。表情はバンダナで覆面しているのでわからない。

女はモシエには答えず、ひとりつぶやいた。

「……………キ、仇は取ったよ」

「あれ？ 村長さん、今……………？」

モシエの耳には聞き覚えのある名前のような気がした。が、すぐに別の音をとらえる。

バルク村の方角から、ババババー、とサイドカーの騒音が近づいてきた。走行風になびく銀髪がかすかに見える。

「お迎えのようダ」

ゲルクの足元、マゼラベースの車上にはリジーナの発射機が設置されていた。

「色々と面倒でしょうけど、子供たちのコトよろしく頼みます」とゲルク。

「面倒は昔っから慣れてるからね」と女。

積荷、—コンテナの中身はどこかでさらわれた少女たちだった。どういった用途にされる運命だったかは、語るまでもない。

これを奪取したジオン残党も焦っただろうが、奪還したゲルクたちも驚いた。

今、子供たちはバルク村で保護されている。

「どうするかは自分たちに決めさせるさ。あっちの村に懐いちゃった子もいるしね」

あっちの村とはジオン残党の村である。

「リリーさあーん！ モシエー！」

いよいよ声が聞こえてきた。立ち乗りした娘がこちらに向け、手を振っている。

「なんでぼくの名前も呼ぶんだらう。うげッ！ お父さんも!？」

サイドカーの船には、例の片足の父親が乗っていた。遠目にも不機

嫌そうだ。

「お父さんにご挨拶していかい、優男？」

「いえ結構です」

マゼラベースを降りた女村長リリーは、バンダナを顔から外しながらモシエをからかう。

「賢明だね。あの子の親父は、ああ見えて頑固もんだから」

カラカラと笑い、リリーはバンダナを投げ捨てた。

それはかつてバルク村の皆から愛され、慕われた娘の形見だった。
(でも、もう必要ない)

そして、長年続けた村長という役職も、固辞しようと心に決めた。

リリーたちは去った。見送ってモシエがいう。

「それにしても、あのサンダーズって基地司令、汚いと思いませんか？」

なんか、ぼくらがこうすること期待してたように見えるんですけど」

ゲルクは、クツクツ、と笑った。

「オマエ、キレ者かと思っただけど、少し抜けてるナ」

「えっ？」

「なぜヤツらの車列に謀ったようにホバー・トラックがいなかったと思っっているんだ？」

不整地で機動力を発揮するホバー車両であれば、第一撃で致命傷を与えられなかった場合、逃げられる可能性はあった。

つまり、フォルタたちには足の遅い車両ばかりがわざと配備された、ということなのか？

「まさか！　じゃあ、ゲルクさんは最初っから？」

「ソレとなく、司令には臭わされていタ」

「きったなーい」

『敵ヲ欺くにはまず味方カラ』という」

『偽りを捨て、隣人に真実を語りなさい』と聖書にありますよ。ま、いいです。ぼくもゲルクさんに内緒があるから。

にしても、司令も人が悪いなあ。ぼくらに殺らせるより、自分で殺っちゃった方がよっぽど早いのに」

モシエは基地司令のドレッドヘアーといかつい顔貌を思い浮かべた。

「彼も昔は戦争屋だけど……イヤ、戦争屋で何度も修羅場をか
い潜ったからコソ老獪ろうかいになったのサ。

護衛に付いてた連中は副司令の取り巻きダ。一緒に甘い汁を吸つ
てたヤツらだからナ」

「うわー、こっちの手汚させて、不良在庫一掃セールなの？」

「どうせ、ジオン残党に襲われたコトになってル」

「事実そうだし、な」

最後のセリフは二人の頭上からかけられた。背後には紫のMS、イ
フリート・シユナイドが立っていた。

*

一週間前の戦闘。

機動戦艦セントラルの甲板上で、蒼と紫の巨人は石像のように動かない。互い
の格闘武器は必殺の間合いである。

ブルー・ヘイズル1号機のサーベル・グリップはイフリートのコク
ピットに向けてられている。が、ビームの刃は形成されず、発振器が不
気味な黒い穴を見せているだけ。

イフリート・シユナイドのヒートサーベルはブルーの腹側部から1
メートルも離れないところで止まっていた。生身の戦いであれば、寸
止めである。

モシエも敵パイロットも不思議だった。お互い相手を殺すつもり
だった。ところが、機体マシンが人間マスタを拒絶した。

それは100万分の一にも満たぬ偶然。両機とも同時にシステム
エラーを起こし、フリーズしたのだ。

先に動いたのはイフリートだった。
「参った」

沈黙していたオープン回線が息を吹き返すと、イフリートのコク
ピット・ハッチが開く。

男は旧ジオン公国軍のパイロット・ヘルメットを脱ぎ捨てた。

「でも、あの寸止めで、……ぼく、おしっこ、漏らしたかと、思いました」

モシエは自分でいって恥ずかしかったのか、左手で口元を隠し、右の人差し指はくるくると伸びたもみあげを巻きつけていた。頬を染めている。

「ソノ仕草は気持ち悪い」

ゲルクが仏像の仏頂面で即答する。

「いや、あのまま続けていたら、私がやられていたのは間違いない」

イフリートから地上に降りたパイロット・男爵バロンがいう。

「あの時、イフリートは左腕が動かなかった。ビームサーベルと正面からの斬り合いでは、じり貧だったろう」

「またまたご謙遜を！」

「事実さ。君こそ虚無恬淡きよむてんたんを地で行っているな」

きよとん、とするモシエを見てバロンは笑った。頬の端にえくぼができる。

後ろに結ばれた総髪とカイザル髭の組み合わせは「没落貴族」といえなくもない。

「分からないの力、モシエ？ 虚無とは『頭空っぽ』のオマエのことだ。覚えておけ、ワタシも前にいわれたことがある。『上司マスターの指示には従うもの』だト。」

さて、そろそろ終わらせよう」

ゲルクの人工筋骨格が手榴弾を遠投する。それはマゼラベースの開いたハッチに吸い込まれた。爆発、一拍おいて誘爆、車体は四散する。長年、村に尽くしたゴッグタングの最後だった。

「これでオン爺さんも安らかに眠れますね」

「死んでないカラ。爺サンを勝手に殺すナ」

「あはは、そうでした。ところで、朝食がまだですよ。ステーキでも食べますか？」

人を轢き殺したことも気にせず、モシエがのん気そうに笑う。

「いいだろう、新入りの歓迎にワタシがおごろウ。しかし、ステーキはどうも……」

ゲルクは地面にひろがったミンチを思い出し、いいよどむ。

そして、

「マクダニエルの方がいい」

ハンバーガー・チェーン店の名を挙げた。

「こんな田舎にはない。それより、保険と称していつまでイフリートに爆弾を仕掛けておくつもりだ？ 一応、借り物なんだが」

新入りバロンは慥然として、カイザル髭をいじる。

いつの間にか風が吹いている。

硝煙の匂いに、彼方の焼畑の焦げ臭さが混じり始めた。

マリィダ・クルスの思い出

月のフォン・ブラウン市。共同墓地に遺体の埋まっていない墓がある。宇宙に生きる時代の人々にとっては珍しくない。

墓標にはこう記されている。

『UC・0089年1月17日。エルピー・プルツィ、ここに眠る』

幼い強化人間は死んだ。葬送は彼女を知る、ジユドー・アーシタと仲間たちによつてとり行われた。

そ・う・い・う・こ・と・に・な・つ・た。

数年後、木星往還船ジュピトリスⅡ世号にて、亡命事件が起きる。このとき、ひとりのモビルスーツ^M・パイロットが、亡命者ミネバ・ザビの影武者を護衛していた。

そのパイロットが死んだはずの強化人間だ、と考えられる者は少なかった。

そして、エルピー・プルツィが死んでくれているならば、この復讐劇は終わっていた。

*

UC・0096年、5月。第三次ネオ・ジオン戦争末期、インダストリアル7沖会戦。

「ビランチャ中尉のガルスが敵艦にとり付いた！ 続け、突撃！」
袖付きパイロット、ジェラルディン・スー少尉が叫ぶ。全天周囲モニターの下方、つまり、彼女にとっては足元の敵艦へ急上昇する。宇宙戦闘であるから、天とか地とかの感覚はない。しかし、敵の強襲揚陸艦ネエル・アーガマの艦底に向け突っ込むMS、ズサは急上昇というほかない。

（あそこに、マリィダ・クルス中尉が……。今行く！）

ジェラルディンは地球連邦軍ペガサス級の意匠をくんだ白亜の巨体を見て、胸が熱くなる。

「ぎゃああ……！！！」

僚機、レッダー少尉のドライセンが被弾し、装備のジャイアント・バズごと左腕を失う。ドライセンは離れていった。

「役に立たない、新米が……！！！」

レッダーの戦線復帰は難しかろう。

ズサはネエル・アーガマとの距離一万メートルで、背部の大型ブースターを切り離す。慣性航行に入ると、大型ミサイルを次々と発射する。

十数発の弾雨はズサの異名「ミサイル・キャリアー」にふさわしい。戦闘濃度のミノフスキー粒子のため画像誘導式ミサイルとはいえ、命中弾は機銃座をわずかにふたつ、潰したのみである。

しかし、そのかいあってか被弾もなく、ズサはネエル・アーガマの中央カタパルト裏面に着艦した。数十メートル先には、口径1800ミリのハイパー・メガ粒子砲の威容がある。飲み込まれそうな黒い輪の空洞は異様でもあった。

それをじっくりと眺める暇もなく、隣接するカタパルト上では友軍のシュツルム・ガルスと敵機が格闘戦を演じていた。ジエガンのビームサーベルを難なくいなし、ガルスは返しのスパイク・シールドの強打で屠る。

転瞬！ 背後から別の敵機、ギラ・ズールが光刃を斬りかかった。

「ビランチャ中尉、危ない！」

ジエラルデインが叫ぶ。とっさにズサのマニピュレータに装備した197ミリ口径ショットガンを向けるが間に合わない。

杞憂に終わる。

突撃したギラ・ズールは、流水のように動くシュツルム・ガルスからカウンターの後ろ回し蹴りを喰らい吹き飛んだ。相当の強撃で、ギラ・ズールは格納庫シャッターに激突する。

「裏切り者、ガランシエール隊！」

ヘルメットの内に唾棄せん勢いで、ジエラルデインはトリガーを絞る。

ズサの手にしたショットガンが火を噴く、と続いてスライド・アク

シヨンで排きよう、装てん、撃発、二連射。18粒のルナチタン・コーティング・バツクショットにより、ギラ・ズールの片腕片脚が千切れた。

とどめの攻撃はカタパルト床面から立ち上がった防護壁に遮られた。

「ジェリー、援護しろ！」

シュツルム・ガルスが無線を受け、ズサも隣のカタパルトへ乗り移る。

ズサが防護壁の物陰からショットガンのにらみをきかす内に、ガルスは連結吸着機雷を格納庫シャッターへ投げつける。機体をひるがえし防護壁に隠れるや、連なった爆発が艦全体を揺るがした。

切り裂かれたシャッターがギザギザに開口していた。

「いけるー！」

その切り口を広げようと、ズサが防護壁から機体の半身を出し、ジェラルデインはミサイルのトリガー・ボタンを押す、

刹那！ 光弾の二連射を頭部に受け、ズサのメインカメラが死ぬ。

「くそっ！」

毒づくジェラルデインは見えていない。前方、シャッター上部のスタークジェガンがビーム・ハンドガンを構え、仁王立ちしていた。すぐさま、シュツルム・ガルスが応戦に飛び出す。

「早く切り替わってよー！」

ようやく手動切替に成功し、補助カメラの狭い視界に飛び込んで来たのは、

(MSの薬莢?)

ドラム缶サイズの円筒が三つであった。くるくると回転しながら、ズサに近づく。モニターの光景をジェラルデインはスローモーシヨンのように眺めた。

テルミット焼夷弾だと気づいたときには遅く、スクリーンは蒼白い火炎に埋め尽くされた。機体は火だるまの状態である。しかし、パイロット自身が燃やされているわけではない。

が、

「あああああ、熱い、あつイ——！」

ジェラルデインは絶叫しつつ、操縦桿をめちやくちやに入力していた。ズサが火炎をまとった途端、蒼い炎を見た彼女は幻痛に襲われていた。

不意に踏み込んだフットペダル。スラストターが火を噴き、転げるようにズサはネエル・アーガマから離脱していった。

【空気残量少。バッテリー残量少】

どれほど彼女の意識は漂流したのだろうか。

警告音と点滅するモニター表示にジェラルデインは正気を取り戻した。

(炎だけであれほど取り乱すなんて)

意外だった。

「とうに克服した、と思ったけど」

声に出してほろ苦く笑うと、生きる気力が沸いてくるような気がした。

ファイア・ナッツはズサの全身の装甲を焼いたが、焼き尽くすほどではない。

「推進剤に引火しなくて、運がよかった」

ダメージ・コントロール画面で損傷をチェックしてゆく。

「母艦まで帰れるかな？ いや、帰れるはず」

今までだってやってこれた。チャンスは逃したが、これで終わりではないはずだ。またやり直せばいいだけのこと。

ズサの現在位置とレウルーラの推定位置を確認し、ルートを算定する。

その時だった。

ゴン、ゴン、と連続的にデブリと衝突する小刻みな振動がコクピットまで届く。

「なにっ？」

ジェラルデインは手元のサブモニターから全天周囲モニターに目を移す。ほとんどが真っ黒か砂嵐の映像だったが、右上方の生きてい

るスクリーンが何かを映し出した。

(え………そんな、まさか！)

心臓が飛び上がった。一瞬だったが、その正体を悟り、声にならなかった。

ジェラルデインは無駄だと知りつつ祈ったが、再度流れてきたデブリがはつきりと現実を突きつけた。

緑に塗装されたガンダリウム装甲の残骸。『NZ-666』と彫りこまれていた。

「誰が………誰が彼女を………う、う、ううう………ちくしよおお!!」

泣きながら、ジェラルデインはノーマルスーツのまま、宇宙に飛び出していた。残骸のひとつに抱きつき、胸を押し当てる。

ひとしきり背中を痙攣させていたが、ぴたりと止まった。

次の瞬間、腰からサブバイバル・ナイフを抜き爆散したMS、クシャトリヤの装甲に叩きつける。

「私ガッ！ 私こそがあいつを殺してやるはずだったのニッ！」

最後の生き残り。ネオ・ジオンに潜り込んでまで近づいた。もう少しだったのに！

「あいつの蒼い瞳を抉り出し、切り刻み、命乞いをさせながら殺してやるはずだったのニ！」

奴のオレンジがかった栗毛も細い顎の線も、すべてが憎い！

「私の恨みを奪った奴は誰だ！ だれダアアア！」

ジェラルデインは酸素が続く限り、ナイフを振るい、その後は宇宙のデブリとなって果てるつもりだった。

だが、運命はまだ生きると彼女にささやく。

やがて、連邦軍艦艇に彼女は救助された。しかし、酸素欠乏症により惰性で心臓が鼓動するだけの『人の形をしたモノ』になってしまった。

その人形が自分を取り戻したのは、それから1年後。

死んだはずのプルシリーズのひとりが木星圏で生きていることを

知った時だった。

*

UC・0097年、8月。ラオス、旧都ヴィエンチャン。ホテル、ド
ン・チン・パレス。

ゲルクは目覚めた。まだ日付は変わっていない。

就寝中、150キロ近い体重でホテルに用意させた一番頑丈なソ
ファを破壊し覚醒した、わけではない。

「長い夢を見たナ」

電子音声がつぶやく。

その内容を反芻する^{はんすう}ように頭をなでまわす。手の平の触覚素子が
脳に伝える感覚は、冷たい金属のものであった。当然である。彼女の
頭部はチタン・セラミックの複合素材に覆われているのだから。

続いて、人工筋骨格の手を見る。手首のサーボモータを回し表裏と
返す。それは生身の人間の首を絞めれば、窒息どころか引き千切るこ
とも可能なマニピュレータである。

当然、マシンの腕に火傷のあとなど無い。人工皮膚の、ざらつ、と
したドライな感触があるだけだ。

「機械であっても、幻痛は起こりうるのだろうか？」

彼女を担当する研究員は「可能性では、ある」といった。

「とすると、ヤツを殺すのに火炎放射器やテルミットは避けたほうが
無難カ」

立ち上がったゲルクは脱ぎ散らかした化粧台^{ドレッサー}の前へ行く。ボトム
スをはくと、ベルトに通した鞘^{シース}からナイフを抜いた。

緑のブレード、それはガンダリウム合金装甲から削りだして作られ
た。『666』と不吉な数字を彫りこんである。

「悪魔が、悪魔を殺す。最高の喜劇だと思わない、マリア・アーシタさ
ン？」

鏡の前に置かれたブツホ・セキュリティ・サービスの社内秘資料^{シークレット}、そ
の一枚目に問いかけた。あるジユピトリス警備要員の履歴書^{レジュメ}である。

栗色の髪と蒼い瞳の女性、クリップで挟まれた彼女の写真に問いかけたのである。

「マリィダと同じ、その目は美しい。抉り取るのはやめダ」

ゲルクは嗤う。数少なく残った生身の部位、舌を出しナイフのブレードをなめた。色は人外の青紫だった。

「自分の腹が斬り裂かれるのを見せてあげたい。腸ハラワタを引きずり出して、首にかけてさし上げますヨ」

気が高ぶったゲルクは眠れそうもない。素早く衣服を着て、ホテルを後にした。

近くを流れる大河、メコン沿いをのんびりと歩く。遠くから屋台の喧騒が、BGMのように漂う。

「チンピラや勘違いした娼婦などいないだろうカ……。それにしても、妙ナ」

夜闇を歩きつつ考え込む。

ジェラルディンGerardinゆえに、かつてのニックネームはジェリーJerryだった。今彼女をそう呼ぶものはいない。

「ゲルクGeilkってそもそも『k』は一体どこから来たのかしら？ ま、ドイツ名みたいでかっこいいからいいけど。まるでワタシじゃない別人みたイ」

「旦那ラオラーオ、ちよと焼酎買ウ金、融通してくんないかえ〜？」

ふと、背後から間延びした声がかげられた。

ナイトマーケットの明かりが朝日に追いやられる刻とき、ひとりの不運な酔っ払いがメコンに浮かんでいた。

長いピンク色がゆらゆらと川面に揺れている。

男の腸だった。

ポケットの中の戦争ごっこ（前編）

UC・0097年、11月。北アフリカ、アルジェリア中部。オアシス都市エルゴレア。

星月の明かりで砂漠は白く映し出された。地平近くの砂丘もはつきりと形が分かる。

3機の旧公国系モビルスーツ^Mが北上しエルゴレアを目指していた。砂上走行用のジェットスキー^Sをはいたザクが2機、そして、指揮官機らしき赤のゲルググ。すべて砂漠戦仕様である。

ズームしたモニターの先、エルゴレアのモスクのドームがうつすらと確認できる距離、センサーが感知の電子音を鳴らす。くさび隊形の中央先頭のデイザート・ザクが停止する。ホバーの制動が冷めた砂を巻き上げた。

「どうした、リキ？」

ゲルググから届く女の無線。

ザクパイロットのリキは目を凝らす。ヘッド^H・アップ^U・ディスプレイには各種センサーからもたらされた情報が複合的に分析され、ある答えを導き出す。

「街の建物、屋上に何かいる！ MSだ」
僚機にもデータリンクされ、HUDに「RM S—119」^{ア イ ザ ッ ク}の文字列が並ぶ。

直後、二条のビームが地を奔^{はし}った。リキ機の両脚が持っていかれる。ザクの上半身は砂地を転がった。

「いい格好だな、ジュニア。後で拾ってやるよ」

僚機パイロット・アマジークのセリフは耳に残った。何もできない自分に、ニキJrことリキは歯噛みする。

「アマジークは右だ」

「了解！」

短い応答を返すザクがモニターの端に小さくなっていく。

先ほどのビームは正面二方向から同時に発射された。

「偵察用のアイザックを除けば、2対2。まだやれるさ」

ゲルググを駆るマサイ・ンガバは、つぶやく。彼女はかつて単機でエウーゴのガンダム・チームと互角に戦った。

「まだまだ経験が浅いね、リキは」

戦場で不用意に止まるな、と教えたはずだが今は身を持って学んだことだろう。

「潜砂からの狙撃。相変わらず、いい腕だね」

初撃のビームは砂漠を這うように抜けていった。敵が狙ってリキ機の脚に命中させたことをほめる。

「出てこないなら、いぶり出させてもらう」

ホバー走行でジグザグに動きつつ、ゲルググは右肩にかついだジャイアント・バズで焼夷榴弾を撒く。敵予想位置に扇状に着弾、破片が燃える焼夷材を砂上にひろげた。夜空が急に赤々と照らされる。

「そこだよ」

砂丘と同化していた小山が突如、盛り上がる。熱と光でサーマルセンサーとナイトビジョンをやられた敵機が、砂の中から飛び出した。

十分な溜めをもって、放たれた焼夷榴弾が敵機の手前で弾ける。

「今のはやれてたよ」

うそぶくマサイは笑ったが、敵機ハイザックのパイロットも口角を上げていた。

火炎を突き破って狙撃用ビームランチャーの光軸が閃く。が、発射の前にゲルググは避けていた。

「その程度の狙いで撃つ？ 手加減してるつもりかい」

ホバーで後退するハイザックをゲルググは猛追した。追いながら、ジャイアント・バズを放つ。重く、バランスの悪いバズーカを高機動下で扱うマサイの手練は、相当なものと言ってよい。

ハイザックも牽制射撃するが、長物のビームランチャーは取り回しが悪い。すでに中から近距離に接敵されたゲルググに、照準は追いきれなかった。たまらず、メインスラスタを焚き上空へ退く。

「私から逃げられると思うな！」

撃ちつくしたジャイアント・バズを捨て、身軽になったゲルググも飛ぶ。腰からビームナギナタを抜いた。

突然、コクピットを騒がすロックオン警告音。

頭上から見下ろすハイザック。

武装を捨てるという一瞬の隙を突き、ビームランチャーの銃口が微動だにせず、定められていた。

(もういいだろ、……タグ?)

長い一瞬の後、ハイザックはゲルググに向けランチャー獲物を投げつけた。

ゲルググもそうすることが当然のように、長銃身を斬る。誘爆はしなかった。

背を見せてハイザックは退却した。アマジークが相手していた別のハイザック、そして後方のアイザックも退いたようだ。無線が入る。

「追撃するか?」

モニターのアマジーク機は肩装甲が焦げている。ビームがかすめたらしい。

マサイが「いや、退き方が鮮やか過ぎる」と言えば、「畏か?」とアマジークは返す。

「私たちの目的はエルゴレアの制圧だよ。深追いは無用さ」

「それもそうだな」

「リキの様子を見てきて」

一機残ったゲルググのコクピット・ハッチが開く。遠い空は濃紺から紫に色が変わってきている。

マサイは自分の長い夜が明けつつあることを予感した。

*

その日、小さな紛争程度に思われていたラプラスの魔が牙をむく。

UC・0096年5月1日、ダカール沖から突如現れた大型モビルアーマー機動兵器は市街地・工業地帯を無差別に攻撃した。

死者・行方不明者、四万余。

以降、一連の戦いは第三次ネオ・ジオン戦争と呼ばれる。ダカール戦はアースノイド対スペースノイド、連邦対ジオンという従来の構図だけでなく、古い恨みも呼び起こすこととなった。

民族対立である。

これはダカールを破壊したガーベイ一族がイスラム教徒であり、白人社会を憎悪し、この虐殺を引き起こしたことが発端である。白人と原住民、お互いの不満や嫉妬をもう我慢する必要はなくなった。風に乗った熱砂のように、憎しみはあつという間に広がった。

ここ北アフリカでは、第一次ネオ・ジオン戦争後、ほとんど崩壊状態だったアフリカ民族解放戦線FLNが息を吹き返していた。白人もアルジェリア欧州人軍事組織OASが対抗する。

エルゴレアがFLNに奪われ、OASは援軍を民間軍事警備会社^Pに要請した。

エルゴレア襲撃から2週間後。アルジェリア中部、ガルダーヤの街。

UC・0087年のネオ・ジオン／FLN連合軍の攻撃で、地上街を破壊されたガルダーヤは再建後、軍事設備の大部分を地下化していた。MSハンガーもそうである。

「これに乗るの? ……腰がないじゃん」

紅白、連邦軍伝統のジムカラーに塗られたMSを見上げ、モシエという。但し、ジムではない。

「君、ブツホの人?」

チーフメカニックらしき黒人が近づく。

「あつ! ……はい。ブツ^Bホ・セキ^Sキュリ^Sテイ・サー^Sビスのモシエ・リジョンです」

「ホワイト・ウォールのエセルバート・ヒンカピーだ。君も民族主義者かい?」

ヒンカピーは苦笑いしながら、手を差し出す。一瞬の戸惑いを見抜かれていた。

「そういうわけじゃないんですけど……。黒人の方が地下にい

らっしやるので、ちよつと。でも、その、ごめんなさい」

「初めての人は大体、そんな感じだよ。普通、オイラみたいな黒いのは下りられないからね」

ヒンカピーは気を悪くした感じではない。モシエはほっ、とした。「うちのルイスさんはセキュリティと口論になって、帰っちゃいました。ぼくも、これ、やられたし」

モシエは左手を自分の右肩に置き、右腕を真っ直ぐ下ろした。それは反ユダヤ的ジェスチャーだった。

「お互い住みにくい街だなあ。オイラなんかあからさまにこれだぜ」
ヒンカピーは中指を立てて見せる。

白人至上主義によって、ガルダーヤの地下街は有色人種の立ち入りは禁じられていた。モシエのようなユダヤ系も嫌われる。

「うわー、天下の白壁に向けて？ 勇気あるのか、バカなの……」
「ちよつとちよつと」

ヒンカピーがとっさにモシエと肩を組んだ。近くを通るセキュリティが彼らをにらむ。

「PMSCの最大手ホワイト・ウォール、なんて言われてたって実態は全然ブラック企業だよ。そこで働くオイラも黒人」
ブラック

「あの、とりあえず、早く離れてくれませんか？」
モシエが身をよじる。

ホワイト・ウォールは地球連邦軍の退役軍人イーサン・ライヤーによって設立された。

一年戦争終結後、ライヤー少将は軍から身を引く。世間的には勇退だが、アジア戦線での失態から出世コースを外れたとも噂される。しかし、引退後も強い人脈を残していたライヤーは、軍から優先的に仕事を請ける代わりに、扱いに困った兵隊を積極的に受け入れていた。

「そんなに嫌がるなよ。ま、オイラも元ティーターズだけどき」
「そ、そういうんじゃないよ。男同士でこんなくつつくなんて！」

腕をつっぱったモシエの頬が桃色になっていた。

「そ、それよりこのバーザム、ぼくらが連邦から貸与される機体ですよ
ね？ やっぱり腰アーマーないんですね」

紅白のMSはメンテナンスベッドに独特のシルエットを立たせていた。

ヒンカピーがいう。

「正しくはこいつはバージムだがね。ほれ、頭もモノアイからジム系のゴグルタイプに変わってるだろ」

「色と頭以外はあいかわらず『甲羅つけたテナガザル』っぽいですけど」

「いうねえ！ でも、もともとはガンダムMk-IIの量産機も視野に入れて開発されたんだぜ。ときがときなら、ジムIIIの立場にこいつがおさまってたかもよ」

バーザムはハイザックやジムIIの後継主力機として、テイターンズで開発された。

ヒンカピーが続ける。

「コストの圧縮に苦労したらしいね。で、大幅な設計変更。独特の外見だけど、フレーム・装甲一体構造はコストと重量を下げながら、防御力の維持に成功したんだ」

「でも、腰アーマーないじゃないですか。股関節むき出しじゃ……」

「腰、腰ってホントこだわるねえ！」

バシッ！

「きやうんっ!?!」

ヒンカピーがモシエの股を叩く。

「ソノ声は気持ち悪いって」

いつの間にか、隣にゲルクがいる。

ぎぎぎ、ときび付いたねじを回すように首を巡らせるモシエ。じと目だった。耳まで真っ赤だ。

「訂正すると、な」

ヒンカピーがいう。

「局所的防御力の低下はある。けど、それを補って余りある機動力を手に入れた」

「つまり、腰部アーマーを排除シ脚部の稼動範囲が増えたことデ、AMBCが有利になったということカ？」

「さすが鉄面姐さん、ご名答！」

「ゲルクだ。よろしく頼ム」

ふたりは握手を交わし、またヒンカピーが口を開く。

「大出力のスラスタージェンジンも脚に積んでるし、……ホント、こいつは悪くないんだが」

「連邦軍にとって、ティターンズは黒歴史だからナ」

グリプス戦役での敗北。連邦軍史上、汚点となったティターンズは、狩る側から狩られる側に追い落とされた。組織だけでなく、MSでもある。UC・0090年頃に高まったモノアイ排斥運動も拍車をかける。

ジオン臭いハイザックは民間やジオン共和国に払い下げられ、傑作空戦機アツシマーはアंकシヤに名と顔を変えなんとか生き延びた。バージムも同様である。

「もつとも、機械だけでなく、人もね。オイラはなんとか軍に残れたけど、民間に向向で、体の良い厄介払いさ。ま、銃殺にされなかっただけでも儲けものかもなあ」

ふしぎな表情をしたヒンカピーが、メンテナンスベッドに立つ2機のバージムを見上げる。自然にゲルクとモシエは無口になってしまった。

ゴン、ゴン、ゴン、と沈黙を破る重低音が響く。隣のベッドが起動していた。

「そうそう！ こいつも来たのか。ほんと、オタクらついでなのか、軍のウケがいいのかねえ」

意味がわからず、モシエはベッドが立ち上がる様子を眺めた。そこに眠るMSが目に入ってくる。

グリーンともブルーとも言い表しにくい手足。

旧公国系ゲルググに似た頭部。当然、モノアイである。

「これって、まさか……」

「運が悪けりや、オイラはこいつに墜とされてたかもしれない」

トレードマークである背部大型放熱フィン、格納されていて見えない。だが、ガンダムマニアであるモシエは正体に気づいた。この機

体は限りなくガンダムに近い。

「ディージェじゃないですか！ うわー、初めて見た！ えと、その……」

「その、まさかっ！」

ヒンカピーが思わせぶりにいう。

「うわー、ホントに？ 乗せてくださいよ！ コクピット入れてください！ アムロ・レイ大尉の匂いくんくんしたい！」

モシエは飛んでいった。

「ヘンタイ」

ゲルクが小声でいう。

「あはは、……奇特な、お仲間、だね」

ヒンカピーもこめかみに汗を浮かべていた。

ハンガーにはモシエの「うわー」がいつまでも響いた。

*

今回の警備業務は、ブツホにとっては「臨時アルバイト」のようなものだ。

「どういうことですか？」とモシエ。

「ホワイト・ウォールオイラたちは北のガス田の警備もやってて、人が足らなくなっちゃってね。それで急ぎよブツホさんにご協力頂いたわけ」とヒンカピー。

ふたつの組織のメンバーは地上街にあるカフェに集まった。

四角い顔をした青年がいう。

「ホワイト・ウォールのMS小隊長をやってるアジス・アジバだ。よろしく。こっちはアイザックのパイロット兼チーフメカニックのヒンカピーと、向こうがもう一機のハイザック・パイロット、マイクだ」
親しげな口調だが、彼のまじめさがにじみ出ている。ブツホも自己紹介を返し、円卓につく。

アジスが説明する。

「2週間前、エルゴレアで夜襲を受けた。敵は一個小隊だったが、手練

れのパイロットがいてやられた。結局、俺たちはガルダーヤまで後退した」

元ジオン公国軍人のバロンがカイザル髭ひげをいじりつついう。

「相手は赤い彗星かなにかですか？」

アジスがまたいう。

「シヤアかどうかはわからないが、赤いゲルググであることは確かだ。

敵はアフリカ民族解放戦線―FLN。連中は白人支配からの脱却を目指しているが、エルゴレアを制圧したのは水資源の確保が目的だろう」

「飲み水力、それとも農業用？ ソレほど砂漠化が進行しているのか？」

「かなりひどい。当面の水を手に入れたから、ガルダーヤに攻め込むとは考えにくいが一応偵察に出ないと。スポンサーとの都合もあつてな。

その間、ここの留守をブツホに守ってもらいたい。最近はMSで武装した野盗のたぐいもいると聞いているから」

「いつ出ル？」

「今夜にも」

出撃準備にホワイト・ウォールは出て行った。ブツホのメンバーだけ残る。

「どうもおウ」

ゲルクの仏像面、目のスリットの奥で光が瞬いた。

*

砂色のガルダーヤの街路が夕暮れに染まる。

突如、15メートル四方の地面が割れた。埋設されたハッチが横にスライドしていく。地下からエレベーターが立ち上がり、巨人が姿を現す。白く塗装されたそれはまさに、ホワイト・ウォール白壁と呼ぶにふさわしい。

ハイザックD型。

ハイザック・カスタムをベースに砂漠戦と、より狙撃に特化したM

Sである。潜砂のため関節部はシーリングされ、頭部にはモノアイとは別にシユノーケル・カメラを搭載。射撃姿勢を阻害するためシールドは装備していない。武装はハイザック・カスタムと同じビームランチャーである。長距離射撃だけでなく、連射も可能な使いやすいビーム兵器だ。

ホバーで機体を浮かすと、2機のハイザックと偵察用MS・アイザックはエルゴレア方面へ飛び去った。

ポケットの中の戦争ごっこ（後編）

夜の砂漠。岩山と砂丘が作り出す幻想的な風景。

今、砂丘のくぼみから赤いデイザート・ゲルググが跳躍した。

「そこっ！」

パイロットのマサイ・ンガバはヘッド・アップ・ディスプレイにハイザックD型をとらえる。ガン・レティクル準に入り込む刹那、ハイザックはスラスターをふかして逃れる。

「この前より速い。やはり、ゲルググにはバズーカよりビームライフルが似合う」とアジス。

「ぬかせ！ 手加減したとでもいうのかい」とマサイ。

オープン回線のハイザック・パイロット、アジス・アジバの声をきき、マサイは笑みを浮かべる。

アジスはアルジェリア欧州人軍事組織OASに雇われた傭兵であるし、マサイはアフリカ民族解放戦線FLNに所属している。敵同士である。

では、これは一体どうしたことだろう？

攻撃をかわしつつ敵機を照準にとらえようと、2機は旋回を続ける。ときに、逆方向に切り返し、岩を遮蔽物にし、またスラスターで跳躍する。

「こりや互角の勝負だな」

高台に陣取るアイザック、コクピットハッチを解放したそこからエセルバート・ヒンカピーが顔をのぞかせていた。

彼の横からまだ少年の面影を残す顔が現れる。眼下のMSの激しい機動戦を見やり、

「すごい……」

ひたすら驚きの声をもらすニキJrことリキだった。

上から見ると、スラスターの青白い光が何度も弾け、地上で花火が打ち上がっているようだ。しかも、それが軌跡を描いて複雑にからみ合う。

「アジスの腕だつて相当だよ。テイターズの中では見劣りしたかもしれないけど、今のそこらの現役なんて全然。マサイさんもかなりのものだね」

ヒンカピーの言葉もリキには届いていなかった。まるで、とりつかれたようにリキは2機を目で追った。自然に思いがこぼれていた。

「俺もマサイやアジスみたいに、強くなれば……」
「え？」

リキをうかがうヒンカピーに気づいていない。

「ガンダムを倒せる。父ちゃんを殺した、憎いガンダムを」
(リキも、……ガンダムにとり憑かれたひとりか)

グリプス戦役中、あるガンダムに関わったことがあるヒンカピーは、ガンダムが持つ魔力を感じ、また胃が重くなった。

そのヒンカピーだが、このごろはパイロットよりメカニクの仕事が板につき始めていた。実戦から遠ざかり、感覚が鈍り油断もしていた。

背後から隠密接近する不明のMSに気が付かなかった。

*

岩山にゲルググを隠ぺいさせながら、マサイは後悔する。

(やっぱアジスは強い。ナギナタが使えたら……)

ルール設定で「射撃武器のみ」なんて決めるべきではなかった。だが、ビームサーベルが使えないのはアジスも同じなのだ。

互角とも思える勝負も時間が経つにつれ、マサイのボロが目立つようになっていった。動きの変化がわずかに遅く、パターン化しつつあった。疲れである。

(次で決める)

それは決意というよりは、やや捨て身の気持ちが入っていた。

岩山から半身を出したゲルググにロックオン警告音がなる。飛び出すと見せかけ、ターン。岩を回りこんで反対から仕掛ける。

(頼むよ！)

誰に祈ったのか？

ゲルググがビームライフルを突き出す。モニターには、フエイントに引つかかったハイザックの姿が、——なかった。

直後、先程よりも長いロックオン警告音。ゲルググの上からである。

スラスターで跳躍したハイザックのビームランチャーが、ゲルググの胸部に照準されていた。マサイは生身の胸に、アジスの武器が突きつけられているように思えた。

「勝負あったな」

アジスの無線にマサイが口を開きかけ、

そのとき！

一条のビームがハイザックをかすめる。H E A T弾がゲルググの足元に着弾する。

自由落下に入っていたハイザックはスラスターノズルを偏向させると同時に、手足を振って緊急回避。マサイのゲルググもホバー走行で岩山に隠れる。

「ヒンカピー、どこからだ!?」

アジスの問いに返事がない。

マサイ機同様、岩山に隠ぺいしたアジス機がシユノーケル・カメラを引き出し、高台を見る。

「くそっ！ ブッホの奴らなんで」

デージェがビームナギナタの光刃をアイザックのコクピットに突きつけていた。

「アジス、ごめんよ」

情けないヒンカピーの声である。

「サテ、説明してもらおう」

無線が電子音声を飛ばす。

射撃後、即回避、砂丘の窪地に潜んでいた、トサカ頭のMSが姿を現す。ゲルググの搭乗するバージムである。

「砂漠の真ん中で戦争ゴッコとはいいご身分だ」

*

この場にはFLN側はディザート・ザクに乗るアマジーク、ホワイ
ト・ウォール側はハイザックのマイクもいた。アジスとマサイの戦闘
を傍観していた。

つまり、全員が出来レースのグルである。

「敵勢力と通じて、サバイバルゲーム？ ソレを給料泥棒という」

バージム右手のビームライフルはマイクのハイザックをロックオ
ンし、左手のクレイバズーカはアマジークのザクに向けられていた。
当然、ふたりもバージムに武器を向ける。

「……金で形かたをつけないか？ お互い傭兵だろ？」

苦々しくアジスがいう。

『「地球を守らねバ」と戦ったテイターズと言葉とも思えない。エル
ゴレアも金で転んでわざと制圧させたの力？」

「事情も知らないでなにをいう！ アジスは水を皆平等に使えるよう
に……」

「マサイっ！ いいんだ」

「ホウ。金ではなく、女に落とされたらしい」

岩陰からゲルググが飛び出した。一挙動でビームナギナタを抜く
と、バージムに肉迫する。

バージムは棒立ちのまま動かない。

危ないところで、横からアジスのハイザックが体当たりし、ゲルグ
グを阻止する。

マイクとアマジークは判断がつかずに動けない。

「お姐さん、そういうことするのやめてください。でないと、ぼく、こ
のふたりを蒸発させなきゃならないんで」

ディージェに乗るモシエがやんわりと警告する。ディージェは左手を
アイザックの肩に置き、接触回線を開く。

「口先だけなんで。そんなことするつもりないですから」とモシエ。

「おっ、やさしいねえ。さすが、MSオタク」とヒンカピー。

「違いますよ。ぼくはガンダムオタクですよ」

緊張感がなさ過ぎる。

「ヒンカピーさん、知ってました？ こいつモノアイの奥にツインアイ用のソケットがあるんですよ。チンガードを外せばガンダムに早変わり！ デイジエガンダム？ いや、ガンダムDかなあ」
「ほう」

長々と続く。

「で、リック・ディアスから急造で仕上げたせいか、バランスは微妙です。ちぐはぐな感じ？ サブ・フライト・システムと組み合わせた戦闘爆撃機的な運用が多かったらしいので、陸戦用でも、さてどこまで、みたいな感じですよ。」

マニアとしては、いくらディアスがガンマガンダムという開発コードがあつたとしても、デイジエをガンダムと呼ぶのは抵抗感あるんですよ！ ただ、あのアムロ・レイ大尉の乗機ですし」
「なあ」

「しかも、ガンダムヘッドにできるってことなら！ ……でも、なんで大尉はガンダムにしなかつたんだろ？ 連邦に禁じられてたからなのかなー。ヒンカピーさんはどう思います？」
「そういうことしゃべる状況じゃないよな」

普段おどけた調子のヒンカピーが説教する。

「……デハ決闘で勝負をつけよう」

いつの間にか、ゲルクとアジスたちの方は裏金でも横流し物資でもなく、^{おとし}漢臭い決着をつけることになっていた。

「2対2ではおもしろみがない。4対1でどうダ？ アイザック以外の全機でかかってこい」

「ええっ!？」

「サイボーグ女^{あま}あ、なめてんのかっ！」

モシエの悲鳴とマイクの怒号が重なった。

「実力を考慮していつてル」

「落ち着け、マイク。そっちがそれでいいなら、異論はない。約束通り、こちらが勝ったら会社には黙っていてくれるんだな？」

「二言はない」

力強く答えるゲルクを、モシエは不安に思う。

「大丈夫ですか？」

「実力を考慮しタ、といったらウ。ソレに伝説のアムロ・レイの乗機ダ。ソノぐらいのハンデをくれてやってもいいだろウ」

「え？ デイジエ使うんですか？」

「ああ、オマエがナ」

「え……」

*

デイジエの正面には1キロの距離を隔てて、2機のハイザック、ゲルググ、そしてデイザート・ザクが対峙した。

高台に立つバージムが真上に向け、ビームライフルを放つ。

合図と同時にハイザックとゲルググは散開した。

だが、単機デイザート・ザクを駆るリキは突撃する。彼はアマジークにパイロットを代わってもらっていた。

「ガンダムもどきめ、ぶっ壊してやるー！」

ガンダムは敵だ。

リキはフットペダルを全力で踏む。

「なるほどね」

デイジエのコクピットでつぶやくモシエにとって、この展開は想定内だった。

ハイザックは中・長距離射程をいかして射撃戦をするだろうし、その隙間をぬってゲルググが接近戦を仕掛けてくることも考えていた。

わからないのはデイザート・ザクだけ。まさか、一直線に向かってくると思わなかったが、推力は陸戦型ザクに毛が生えた程度なので、対応する間があった。

「やる気は買うけど早死にするよ。ま、遊んであげるっ！」

デイジエはホバーで横移動しつつ、右手のビームライフルを無造作

に上げる。HUDの照準にザクをとらえかけたところで、ロックオン警告音がなる。右急旋回でハイザックからの照準を外す。

「さすがに、簡単にはやらせてくれないか」

警告音は断続的だが、鳴り止まない。「3秒連続でロックオン」された場合、撃墜判定というルールだった。左右に二回切り返して、ようやく2機のハイザックの射線を外すが、

「うわっ、次はお姐さんか!」

ビームナギナタの軌跡も鮮やかに、ゲルググが躍りかかった。今回は格闘戦もありだ。

デイジエも同じくビームナギナタで光刃を受ける。低出力でも、光刃が生むフィールドの干渉は2機の装甲をまぶしく照らす。

(格闘戦をやってるうちは、ハイザックもやたら狙えないだろうけど)足の遅いザクが追いつき両刃型ヒートホークを振り上げた。デイジエとゲルググの立ち位置を入れ替えながら、赤熱刃をかわす。

「ザコでもうっとおしい!」

モシエの顔がイラつき歪んだ。

背後を斬りつけようと追いつがるザクには、ゲルググから離れざま横蹴りを入れ距離を取る。

「あぶなっ!」

不用意な後退だったのでゲルググの光刃が右肩シールドをかすり、縦の筋を描いた。

さらに、短い後ろ跳びショートバック・ステップで逃げるデイジエ。そこへ再度ロックオン

警告。ハイザックの十字砲火だった。

(だから、4対1なんて無理なんだって!)

心中で不平をもらしつつ、モシエの手足は絶え間なく動く。ジグザグの機動を見せ、デイジエが逃げ続ける。

2秒近いロックオンが続く中、唐突に途切れた。

砂漠に出現した岩山の陰にデイジエが入り込んだ。実際には、攻撃を避けながらモシエが意図的にそこへ逃げたのだった。岩山は高層ビルを3、4棟つなげた大きさがある。

もつとも、砂漠にひとつある岩山は、

(あんまり役に立たないよなー。さて、どうする?)
時間稼ぎにしかない。モシエはほんの数瞬だけ逡巡し、作戦を立てた。

「マイクと俺で回りこむ。逃げてきたところをマサイたちが！」
「わかったよ、アジス。遅れるな、リキ！」

モニター正面の岩山に対してアジス機が左に、マイク機が右に旋回する。

マサイのゲルググとリキのザクは岩山に直進した。

アジス機は山陰に隠れたが、マイク機は岩の向こうに行きかけ、引き返す。岩山を一周したデিজエが戻ってきたのだ。

ゲルググがビームライフルを照準する。

「終わらせる！」

「ぐっ、マサイさんか」

ゲルググとデিজエは中距離、ライフルの間合いだ。回避しつつデিজエも右手のビームライフルで応射の構えを見せる。

「さっきみたいに仕掛けて来いよっ！」

じりじりするモシエは強い口調になる。

デিজエ左手のナギナタはだらりと地面に向けて下げられていた。光刃は大地の砂を焼いている。

先に格闘の間合いに飛び込んだのは、リキのザクだった。

ナギナタでヒートホークを受け止めつつゲルググをうかがうと、射撃をあきらめ突撃してくる。

(よしっ！)

敵を威嚇するように、デিজエの背部大型放熱フィンが展開した。

ビームナギナタの光刃が不意に消える。つばぜり合いからザクは前のめりに姿勢を崩した。

デিজエは機体をスピンさせザクを十分に引き込みながら、バックブロー気味にナギナタを払う。再度出現した光刃はザクの首元に命中した。

「ひとつっ！」

通常の出力なら首をはねていただろうが、今は装甲を焦がす程度ですんだ。

背後からすさまじい殺気！ ゲルググが迫る。

回頭させずに、デイジエは背部スラスタノズルを四方に向け、噴射する。

「なに!？」

マサイは驚愕する。

あたりがデイジエのナギナタに焼かれた熱砂と、ガラス粒子によってベールがかかる。光学センサーとサーマルセンサーが死んだ。

「見えなくなっちゃって！」

格闘戦の間合いだ。マサイは予想位置の正面に光刃を突きこむ。手応えがない。

直後、ゲルググの背後から衝撃を感じた。強くはない。だが、サマルソルト宙返りから後ろを取ったデイジエのナギナタに三度斬られていた。

「ふたっ！」

砂煙が晴れる前にモシエは敵意の方角へデイジエを突っ込ませる。マイクのハイザックだった。アジス機は岩山が邪魔になって、援護できな

い。ハイザックとデイジエが同時に互いのランチャーとライフルを向ける。実戦であれば、相撃ちだったかもしれない。だが、「3秒ロックオンルール」である。

反撃に戸惑い、マイクはショート・バック・ステップで逃げる。

その隙にデイジエは一旦上昇し、低空で頭頂部をマイク機に向ける。爆発的にスラスタが青白い花卉を咲かせた。

頭から突っ込むデイジエは激突寸前で、ハイザックの左側方を擦過する。

瞬間、マイクは全天周囲モニターの正面に、ビームの輝きが奔るのを見た。すれ違いざまナギナタでモノアイを一閃されていた。

「みっつっ！」

ようやく、アジス機からのロックオンがうるさい。急旋回しロック

オンを外す。

ディージェもビームライフルを向けるが、今までとうって変わってゆつくりとした動作だった。

*

アイザックのタイマーが0を示す。

「時間だ。どっちも武器を引いてくれ」

ヒンカピーが終わりを告げる。

「なあ、モシエ。お前わざとドローにしただろ？」

「そんなことないですよー」

隣に立つディージェと接触回線を開き、ヒンカピーがいう。4対1で3機被撃墜判定であるから、実際はアジスたちの完敗といえる。

「ま、そういうことにしようか。鉄面姐さんもやさしいのな」

「そうですか？ この前ラオスじゃ一個小隊皆殺しにしましたよ」

「あ、はは……。それは、……知らんけど。」

でも、本当に密告するつもりなら、決闘なんかしなかったさ。ガルダーヤに帰って、上に報告しちやえばそれですむことだろ？」

「確かに」

「ワイロも要求しないし」

マサイのゲルググとアジスのハイザック、そしてゲルクのバージムが機体を寄せていた。コクピットを開放した彼らは肉声で話しているらしく、ヒンカピーとモシエは聞こえない。

「やさしいよなあ。『こんなことやっていると、いつか消されちゃうぞ』って忠告だよ」

ヒンカピーの言葉を理解したモシエは気づいた。ゲルググとハイザックは互いに寄り添うように立っている。

「そういうこと？ はあー、ごちそうさま。砂でじやりじやりするんだからさー、早くシャワー浴びたいなー」

「そういや、モシエくんよ」

「はい？」

「首は平気なのかい？」

MSには過大な加速による怪我からパイロットを保護するため、Gリミッターリミッターが設けられている。明らかにデিজエの機動は制限を取り去った、機械的極限に近い性能だった。

「オイラが見たところ、相当の対G特性の持ち主じゃなきや」
首を痛めるだけでなく、脳にダメージを負う可能性もある。モシエの体つきは細い。

「普通の人間にやあんな曲芸はできないぜ。こんなこと聞きたくないがね。お前さんさあ、……」

ふと、ガルダーヤの方角から小さな光が向かってくるのが、モニターに映る。ワツパのヘッドライトだ。ワツパは地上すれすれを飛ぶホバー・バイクである。

まだ遠い。が、モシエたちに気づいたらしく、さかんにパッシングしている。

と、

「ザ——、野盗が襲撃してきた！ バロンが応戦してるが数が多い！」

ガルダーヤに残したブツホの同僚、ルイスだった。

無線に混じる風切音から、相当飛ばしているらしい。

ほつれた袖（前編）

野盗の攻撃は奇襲ではなく、強襲だった。ガルダーヤの郊外、砂漠に埋設したセンサーが敵の接近をとらえたためだ。

対応できたのは不測に備え、地上で待機していたバロンのバージムと、10台のガルダーヤ防衛隊のミサイル・エレカだった。荷台に有線ミサイルを装備した簡易対MS戦闘車両である。

バロンは街の外に退避する。

（地下街の制圧が目的なら、準備砲撃が来る）

だが、予想したような対地ミサイルや砲弾は降ってこなかった。（その手の武器を持たないか、地上街も無傷で手に入れたいから、か？）

バージムをホバー走行させながら、バロンは思い巡らせる。

ナイトビジョンの単色の世界、全天周囲モニター正面に広がる砂漠の地平はモヤがかかったように、不明瞭になっている。

「むー」

とつさに急旋回したバージムの脇をビームの光軸が奔る。

バロンもビームライフルを応射する。

ガルダーヤ北面から迫る3機の敵モビルスーツ^M、ゲルググ1個小隊が即散開した。

「ほう、袖が付いているな」

敵機の前腕部に施された装飾^{エンゲレイベンゲ}を見てバロンは嗤う^{わら}。敵をあぎつけたというより、元ジオン公国軍人の自分が公国復権^{ネ・オ・ジ}を目指す連中^{オン}をまさに今葬ろうという状況が、

「悪い冗談だ」

バージムは稼動範囲の広い股関節による低い姿勢と、大出力スラスターでホバー旋回を続ける。右手のビームライフルが再度閃いた。

袖付きのパイロットは、その体勢で正確な射撃がくるとは思わなかったのだろう、ターン切り返しのおわずかな停滞した瞬間に、1機のゲルググが光軸に貫かれた。

腹から背に抜けるメガ粒子の槍はエンジンを大爆発させ、機体を

木っ端の部品に変えながら砂漠を照らす。

「しかし、貴公らも武人ならばわきまえていよう。生きるも死ぬも時の運」

足並みを乱した隙を突き、ホバーで後退する1機を追う。さがりながら、牽制のビームを放つゲルググだったが、殺意のこもらぬ射撃は、「狙いも甘いことよ」

頭上をすれすれで通過した光軸がバージム頭部のトサカ状のアンテナを焦がす。

反撃に見舞ったビームはゲルググの右大腿部を貫通。右脚がもげ暴走した推力によって機体はコマのように回転した後、砂を撒き散らして転倒する。

最後の1機はわずか数分の内に僚機が墜とされ、恐れをなしたかガルダーヤの方角へ急加速し逃れた。

「ずいぶんいい逃げっぷりだが、……」

そのスピードにいささか疑念を抱いた。

(ゲルググにしては妙な?)

回頭しガルダーヤの方角へ戻す。戦火による炎が街のあちこちから上がっていた。

「すでに、中心まで入り込まれたか」

わずかに歯噛みしたバロンはフットペダルを踏み込んだ。

*

バロンとは街をはさんだ反対側。

「ペンプティの偵察が当たっていたか」

袖付き中尉、アヴリル・ゼックがいう。

ほとんど抵抗らしいものも受けずに街を制圧でき、眉尻が下がる。が、彼が駆る水陸両用MS、ゼー・ズールのコクピットを緊迫した無線が引き締める。

「アヴリル中尉！ アランとザカリーがやられました。援護を頼みます！」

北から南下し、街を挟撃する予定のテツセラ・マツセラからだ。冷静沈着なテツセラがめつたに出さない焦りを含んでいる。

「敵は何機だ?」

「1機です。テイターンズのバーザム」

「バカなっ!」

アヴリルは声を荒げる。

(ゲルググの『皮をかぶった』機体を、しかも1個小隊をたった1機で相手する!?)

ありえない。テツセラは公国軍時代からの古参兵なのだ。

「私が行く。他は地上の掃討と地下街の制圧を急げ」

アヴリルがいうと、曲がり角から出現したミサイル・エレカが誘導弾を放つ。スラスターのスピンターンでかわしたゼー・ズールは、左手のザクマシンガン改をワンショット。車体はバラけた。

「弱いのに、出てくるからそうなる!」

イラつきを、どなって発散する。

フットペダルを底まで踏み込む。いまや水中用装備を放棄して久しい。身軽になったゼー・ズールは空に躍り上がった。

上空からは戦況がよくわかる。

一旦、北上し郊外に逃げた敵機バージムは反転、メインストリートを猛然と南下していた。ゼー・ズールが自由落下に入ったときには、テツセラ機を追うバージムは早くも右折―西に曲がる。旧市街のうねった街路で流星のスラスター光を見せていた。

重力加速を感じながら、アヴリルはトリガーを絞る。ゼー・ズールの右手、ビームライフルから光軸が伸びる。

狙いは甘かった。外れた。

が、直後にバージムが見せたインメルマン旋回風の縦ロールはすさまじい。まだ空中にあるゼー・ズールに肉迫しながら、バージムがビームを応射する。

「く……っ!」

とつさに腕を振り、スラスター噴射。殺意の光軸が右上腕部を焦がしていった。バランスを崩し、ゼー・ズールのライフルは明後日の方

角に向けられている。

(次弾が！)

敵の畳み掛ける攻撃を予期し、ゼー・ズールは左手ザクマシンガンを牽制に放つ。

すでに近距離に入ったバージムは弾雨をもともせず突進し、そして、

「なに!？」

アヴリルはバージムが投げつけたビームライフルを撃っていた。Eパックに命中した刹那、あたりは照明弾に等しい輝きに満たされた。

閃光と熱を突き破って、バージムが迫る。袖口から飛び出したグリップは早くも光刃を形成していた。

ゼー・ズールが唐竹割りにされる直前、巨大な爪がビームサーベルを受け止める。ザクマシンガンを投棄するや左前腕からは電熱兵器ヒートクロウが飛び出していた。

両機の接触回線がつながる。

「ビーム兵器はクラッカーじゃないんだぞ！」

「問題ない。貴様のライフルを奪って撃つ」

激昂するアヴリルと冷静なバロンは対照的だった。

2機はからみ合いきりもみ状態になる。墜落の寸前で、バージムがゼー・ズールを蹴り反動で離れる。

バージムは狭い街路の交差点に軟着地したが、ゼー・ズールは一軒の空家を倒壊させながらのハード・ランディングだった。

彼我の距離はおよそ200メートル。アヴリルは焦る。

(奴にはライフルがない。距離を保って射撃戦に持ち込めば、………だが)

常識で考えればそうなのだが、バージムの戦い方はどこか、

(キレてる！ 正攻法では勝てない)

である。

アヴリルが決断する間もなく、再度バージムが突撃にスラスターをふかす。

瞬間、ひらめいた。

「欲しければ、受け取れ！」

ゼー・ズールがバージムに向けビームライフルを投げつける。

アヴリルはバージムがライフルをとっさに斬りつける、と予測した。しないまでも、ぶつかるか、かわすかしていずれにしろ、

(隙ができるはずだ)

想定外だった。

ほぼ同時にバージムもビームサーベルを投げていた。回転する光刃がビームライフルを両断し、先ほどと同じ超小型太陽が出現する。ちょうどバージムとゼー・ズールの間距離であった。これはアヴリルだけでなく、バロンも驚いたらしくバージムの足が止まっている。

衝撃から立ち直るや、

「一旦退く！」

「情弱」

後方斜め上空にスラスターで跳躍するゼー・ズール、そして、猛然と機体をつつませるバージム。

明と暗が分かれた。機体の性能より、思い切りの良し悪しがはつきりと出た。

ゼー・ズールの全天周囲モニターの足元から、バージムは沸きあがるように迫る。その左袖口からサーベルグリップが飛び出す。

転瞬、長大な光刃はすくい斬りにゼー・ズールを斃たおすだろう。

(どこで間違えた……?)

目前に横たわる自分の死をアヴリルはゆっくりと眺めた。

(トリントンか？ 箱が開放されたときか？ それとも……)

堂々巡りの後悔が渦巻き、答えはかけらもなかった。

「アヴリル中尉っ！」

女の無線と共に、バージムに榴散弾が撃ちこまれる。近接信管によりばらまかれる散弾雨がガンダリウム装甲を打つ。

我に振り返り回避入力したアヴリルと、わずかにひるみ軌道をそらされた斬撃。バージムのビームサーベルは空を切り裂くにとどめた。

アヴリルはフットペダルを強く踏み、さらに距離を取る。

「敵の増援です。包囲されつつあります。援護します、撤退を！」

街路の低木に潜みマゼラトップ砲を構えるザク・デイズート、クイント中尉からの無線だ。バージムへの一撃も彼女である。

「……頼む」

苦々しくアヴリルは応答する。

クイント機が殿で砲身が焼けるまで牽制射撃する際に、テッセラほか3機のゲルググもどきも後退する。

「クイント中尉も早く、……」

モニター上の敵味方識別信号が入り乱れる表示を見て、アヴリルは焦る。

そのとき、街の郊外にいたザク・デイズート、クイント機の信号が消滅した。すでに戦闘地域を脱したアヴリルは、遠く爆発音を聞いた気がした。

*

ガルダーヤの地下街に設けられた留置施設。

時刻は真夜中に近い。

一室からあからさまに不満そうな男たちが退去する。ガルダーヤ防衛隊の面々である。半脱ぎのズボンのベルトを締めなおしている男もいた。

「すまない。コノ埋め合わせはいづレ」

原稿を読み上げるような電子音声のゲルクは、モシエをともなつて部屋に入る。

「クイントさんと呼べばいいのか？」

「クイント中尉と。仲良くする理由はないはずだ」

ゲルクは床に落ちヒビが入ったメガネを、ジオン残党のクイントにかけてやる。後ろ手に手錠をはめられ、パイプ・イスに拘束されたクイントにはできない。

「ワタシたちが間に合って良かった。もう少し遅かったら、『お召し上がり』にされてたところですよ」

一年戦争の頃から従軍するクイントだが、女の汗気がないわけではない。

「もう少し早ければ、殴られずにも済んだのに」
クイントがいう。

「そうですネ」

ゲルクが答えて、裏拳気味にビンタを放った。

メガネが粉々に碎ける。一緒に白いものが宙を飛んだ。クイントの歯だ。彼女自身もイスごと床を転がった。先ほどの連中どころではない。人工筋骨格が生み出す、意識が飛ぶほどの痛撃である。

「起こせ」

「はいはい。暴力反対ですよー」

「戦車で人をひき殺すヤツがいうことカ」

「マゼラアタックは戦車じゃなくて、自走砲ですよー」

まじめなのか、ふざけているのか、モシエはクイントを起こす。

ゲルクは抜いたナイフをもてあそんでいた。

「コノ緑のブレードはガンダリウム合金の装甲から削りだしたから、とても軽イ。使いやすくてネ。オマエはいい素材になりそうダ」

近づき、クイントの前でかがむと視線を合わせた。

「まずは足の小指から切り落とさせてもらウ。何本目で吐くか賭けようカ？」

ゲルクは笑って後ろのモシエを振り返った。顔を戻したところに、クイントが血唾を吐きつける。

瞬間、ナイフの切っ先はクイントの左眼球に突き立てられ、

「ぎっ………！」

カチリ。

クイントは悲鳴を飲み込み、ゲルクは動きを止めていた。

「なんのつもりダ？」

モシエがK-38小型リボルヴァーをゲルクの鉄仮面に向けていた。撃鉄ハンマーがすでに起きている。

「目はやめましょう。傷の衝撃で死ぬかもしれせんよ」

「知ったような口をきク」

「ええ。知ってますから」

自信たっぷりなモシエに、（おや？）と思いゲルクは再度振り返った。

「ぼくもやられましたから。ほら」

モシエは自身の左目に手をやり、目玉を抜いた。眼球そっくりの巨大コンタクトレンズを手の平で転がす光景はシュールだった。

「なんだ、義眼なのカ。おどかさナ」

「や！ 驚いてはくれたんですね？ 大成功♪」

モシエはにこにここと笑うが、左目の生々しい肉色との組み合わせは、ひどくアンバランスだった。

「これ死ぬほど痛かったですよ。美人のクイントさんにはこうなってほしくないな」

「ちよつと、ソレ貸してくレ」

「ほいつ」

モシエが投げた義眼をキャッチし、ゲルクはクイントの顔に押し付ける。

「オマエもえぐって欲しいのカ？」

*

「じやりじやりー。シャワー浴びたいー。眠いー」

モシエをなだめすかし、ゲルクとバロンの3人はブリーフィングで借りたカフェに集まる。とうに閉まった店のカウンターが占拠され、勝手に冷蔵庫の中身を飲み食いする。

「今回はワタシの失敗だった。バロンにはずいぶん迷惑をかけたナ」

冷えたビールの缶をバロンに渡しながら、ゲルクがいう。

「ひとつ貸しにしておこうか」

「あれー？ 勝手に決闘とかさせた、ぼくにはいうことなしですか？」

「まさカ！ ほうびを取らせよう」

芝居がかった口調のゲルクは冷蔵庫へ向かった。プラスチックの箱とスプーンを持ってくると、

ドンッ!

乱暴にモシエの前へ置く。モシエの顔がひきつった。

「オマエの大好きなアイスクリーム2リットルだ。好きなだけ食エ」

「ぼくが甘いのが苦手だって知ってるくせにー! 嫌がらせだよ」

「決闘というのはなんだ? ホワイト・ウォールとなにかあったのか?」

「実は、……………」

ゲルクが説明する。

「なるほど……………。しかし、私はネオ・ジオン残党の方が気になる」

「同感だ」

先ほどの戦闘。

孤軍奮闘するバロンに加え、ガルダーヤに急行したブツホのゲルク、モシエと、ホワイト・ウォールのアジスら5機のMSに挟撃され、袖付きは退却した。

バロンがいう。

「戦慣れしているように感じたが、どうにもやる気がない。ダカールヤトリントンで聞いたような全滅必至の覚悟がない」

「おかしなコトは他にもある。ワタシはヒンカピーと一緒に、撃墜したMSの検分に立ち会った。アレは外装だけゲルググだった。内骨格にムーバブル・フレーム、おそらくネモだろう」

「それは確か元カラバのMS……………」

ゲルクがうなずく。

「タイミングからいって残党がコノ街に斥候を入れていたのは間違いない。というコトは、前々から狙っていた。だが、武器やMSの強奪が目的なら砂漠でワタシたちを待ち伏せているはずだ。連中はガルダーヤを襲った」

「はあ……………。前のネオ・ジオン／FLNの襲撃はガルダーヤ地下街を制圧するためだったんですね?」

ため息をつくモシエ。一向に減らないアイスを食べつついう。

「そうだ。もつとも10年前のハマーン軍と今日の袖付きでは立場が

まるで違ウ。当然、目的も違うだろう」

「一年前の第三次のとき、うわさがあった」

ふと、バロンがいう。

「袖付き一部部隊に新たなスポンサーがついた、と」

「一部部隊？」

モシエが身を乗り出す。

「地球に降下していた連中だ。ガランシエール隊、とかいつてたな」

「スポンサーというのハ？」

「ルオ商会だ」

「なるほど。パズルピースが集まってきたナ」

「と、いうと？」

バロンがきく。

「捕虜を尋問して聞き出しタ。連中にゲルググもどきを渡したのも、ルオ商会タ」

「きな臭いな」

「ココからは全部ワタシの推論ダ。ガルダーヤの北西、ハシルメルにガス田があるのは知ってるナ？」

いきなり登場した固有名詞に戸惑い、モシエがきく。

「確か……、ヒンカピーさんたちホワイト・ウオールが守ってる、半公営のガスポロム・コンツェルンの……、ガス田ですよネ？」

「そうダ。旧世紀からあるガス田だが、地中海のアルジェに抜けるパイプラインを新たに開発しタ。コレは当初、ほとんどの資金をルオ商会が投入していタ。ところが完成間近になって、連邦政府がストップをかけタ。環境破壊を理由にナ」

バロンが嗤う。

「こんな砂漠の真ん中で環境破壊か。滑稽だな。それで？」

「開発は頓挫するかと思われたガ、先のガスポロムが参画するコトで一応の決着はついタ。が、パイプライン合弁会社の持ち株は51パーセントを持っていかれたタ。対するルオ商会は24パーセント」

「それじゃルオ商会は金を出すだけ出して、やられっぱなしじゃないですか！」

「そうダ。そして、残りの25%を取得したのがライヤー物産、つまりホワイト・ウォールの親玉ダ。さらに、イーサン・ライヤーはガスポロムの役員にも名を連ねているし、連邦軍出身の政治家にも顔が利ク」

「それだけ調べていた、ということは当たりをつけていたな？」

「まあ、ナ」

バロンの言葉に、ゲルクはにやりと笑う。

「面白いな。OASを支援する名目で北アフリカに私兵を置くホワイト・ウォールに、商売ガタキに一泡吹かせたいルオ商会。商会は以前のコネを利用し袖付きに接触、裏から手を回してガルダーヤを制圧させようとした」

「そうか！ ネモは昔ルオ商会が支援していたカラバで使われてたMSだし、ガルダーヤを押さえればガス田までは目と鼻の距離なんだ！」

「声が大きいゾ、モシエ！ さて、コレから連邦政府とFLNがどう動くカ、見ものダ」

「アジスとマサイさん、ロミオとジュリエットになっちゃうのかな？」

「もうなってる」

いまさらのモシエに、ゲルクがあきれた。

「元ジョン軍人の私から見て、ゲルクの仮説には不可解な点がある」

バロンがいう。

「なにカ？」

「ジオニストは理想主義者かつナルシストだ。私兵と違って金で転ぶことを嫌う。形の上で従属していても、それは偽りか、あるいは秘めた目的を持ち協力しているように見せているだけだ」

「袖付きがルオ商会の手先になっているのは、裏があるってことですか？」

モシエの問いにバロンはうなづく。

「元ジオニストの分析なら確かだろうネ。ソレで、……オマエはナニをたくらんでブツホの私兵をしているル？」

ゲルクの仏像面、目のスリットの奥で暗い光が瞬いた。

「私は滅私奉公するつもりさ。ブツホこそ、これからどうするんだ？」
どこ吹く風でカイザル髭を整えるバロンに、「上が決めることだ」と
肩をすくめるゲルク。ひとりモシエは親のカタキに出会ったような
顔をして、アイスをがつつく。

3人の頭上で天井扇シーリングファンがけだるそうに回っていた。

ほつれた袖（後編）

袖付き中尉、アヴリル・ゼックは第三次ネオジオン戦争のダカール襲撃時に地球へ降下した。彼はオーストラリアのトリントンへ転戦後、地上に残る。

戦いは宇宙へと移っていった。

終息宣言ともいえるミネバ・ザビの放送を、アヴリルはアフリカへ脱出する潜水艦で聞いた。

「……私たちの中に眠る、可能性という名の神を信じ——」

銃声。

耳鳴りの中、モニターに弾痕があり、黒い板と化していることにアヴリルは気づく。

古参兵のひとりがヴアルタP8拳銃を握っていた。

「われわれが独立戦争、いや連邦の犬にいわせれば一年戦争でしょう、それから長い年月、身をやつしてまで戦ってきたのはなんだったんです。

人の善意？ そんなんじゃない。主権国家としてのジオン承認でしよう！ その可能性を信じて戦ってきたんです。

苦労も知らない小娘の、訳のわからん可能性のためじゃない！ 違いますか、中尉？」

銃口から立ち上る青白い硝煙は、彼の積年の恨みと怒りに見えた。

古参兵とアヴリルとの付き合いは短い。地上に降りてからだ。それこそ、アヴリルが小学校のまじい給食に文句をいっていた頃から、地球に残り戦っていたのだろう。

硬くなった彼の心に、ミネバの善意はとどめを刺した。アヴリルはかけるべき言葉を持たない。

詰め寄ろうとする兵はアヴリルの肩をつかみ、……かけてやめた。

その後の動作はいたって自然だった。

彼は拳銃を左手に持ち替え、目が覚めるような敬礼を送った。

「ジーク・ジオン」

そして、自分のこめかみを撃ち抜く。側頭部に銃口を押し付けたため銃声はボスツ、とくぐもった不気味さを含んでいた。

(あれから一年半、か)

アヴリルはアジトの隠ぺいした入り口から外をうかがう。

ここはガルダーヤの東北東70キロ、ゼルフアナの街郊外。干上がった河床かじょうを利用し、横穴が掘られていた。

ガルダーヤの襲撃に失敗してから十日が過ぎていた。

スポンサーであるルオ商会に連絡をとると、

「補給はない。再度、攻撃をかけるように」

有無をいわせぬ指示があった。

五日前、ガルダーヤへもう一度斥候に出たペンプティは戻ってこなかった。

(これまで、か)

横穴の奥に戻ると、最後まで残った10余名の部下、――いや今は同志といったほうがよいか――が思い思いに体を休めていた。もはや、軍隊の体をていなしていない。

(同志……だが、こころざしもなく、か)

野盗に成り下がった自分、そして彼らの姿を見てアヴリルは感情が高ぶった。

不意に声がかかる。

「アヴリル殿」

「ああ、テツセラ中尉。すまん、ちよつと砂が目に入った」

慌てて袖でこする。ネオ・ジオンの意匠をこらした袖も、ほつれたままにされて久しい。

「そろそろ出撃しましょう」

「わかった。皆を起こしてくれ」

アヴリルは自決した古参兵を思う。

(ゲリラとして戦った苦節の16年と、こめかみに銃口を当て引き金を絞る一瞬。はたして、どちらが、苦しかったのだろうか?)

今のアヴリルに残された選択肢は少ない。

降伏しテロリスト袖付きとして厳しい罰—おそらく死—を受けるか、このまま砂漠に日干しにされるか—これも死—、もしくは、(戦っていきさぎよく討ち死にするか。それもいいだろう。心残りは連中を宇宙に帰せないことだ)

ルオ商会に協力するに当たって、アヴリルは条件を出した。

「希望者を宇宙へ帰してやって欲しい。ほかに報酬はなにもいらない」

である。

(だが、今となつてはどうすることもできないな)

アヴリルは寂しげに笑う。

そのときだった。

横穴の外から湧き上がるようなスラスタの爆音。入り口にかけられた砂色の布は噴射にあおられ、ばたついていた。

(モビルスーツ、・・・3機はいる)

戦闘準備を終えた同志たちに、

(穴の奥へ逃げる)

身振りで指示しながら、自身は入り口の布をひそかに開ける。

はたして、2機のバージム、そしてディージェが扇状に囲んでいた。

当然、その手のビームライフルやクレイバズーカを向けている。

アヴリルは深く吐息する。彼らのMSは外の砂漠に潜って隠されていた。横穴の入り口はこのひとつしかない。

(絶体絶命か)

振り返ると、テッセラがなにか悟ったような顔をして、腰から手榴弾を取り出した。だが、決心がつかないのか、アヴリルの命令を待っているように見える。

「ここまでだな。テッセラ中尉、それを私にくれ。ピンは私が抜・・・」

「アノちっぽけな石ころを。パラオと名付けたヤツは間違いなく皮肉屋だろウ」

唐突に、バージムの外部スピーカーから響く電子音声。

アヴリルは全身が硬直するのを感じた。彼だけでない。一緒に降下した袖付き組の同志は全員動きを止めていた。

ゲルクがいう『パラオ』とは、太平洋に浮かぶ美しい島々の楽園、ではない。地球と月の引力の拮抗点、—ラグランジュ点—通称L1に浮かぶ鉱物資源衛星のことである。

そして、かつて袖付きがジオンの再興を秘めた拠点でもある。

「シリンダーの端、『山』から吹き降ろす砂風。シャフトにたまった『永久の霧』。アレは幻想的だった」

霧の正体はパラオ中心軸周辺、無重力帯に漂う砂塵さじんである。

「しかし、何年も止まったままのシールドマシンは不気味なオブジェとも思えたナ」

(こいつはパラオを知ってる)

アヴリルは思う。

捕虜から聞き出した内容ではない。特に理由があるわけではない。しいていえば、直感である。

「夜も早い。夕食はウサギのソテーにしよう」

「中尉っ！」

テッセラの制止も聞かずに、アヴリルは飛び出した。腰のヴァルタP8を抜き、バージムへ向ける。

雲ひとつない青空の下、乾いた銃声が響くだけ響いて消えた。

薬室には装てんされた弾丸が残っている。だが、まだ踏ん切りがつかなかった。

それを見透かしたように、

「死ぬ決心があれば、なんでもできるはずです。アヴリル中尉」

ゲルクがいう。

「大義もこころざしも失ったのなら、ワタシがあなた方に新しい、そして最後の役を与えましょウ」

*

ガルダーヤから北北西およそ60キロ。ハシルメル・ティウアン空

港内、民間軍事警備会社ホワイト・ウォールのMS基地。

遅い夜のラジオからはドイツ女の甘ったるい歌声が流れていた。ライブ音源なのか、曲の終わりに拍手が起こり、DJがしゃべりだす。「マレーネ・ディートリッヒの『リリー・マルレーン』でした。次は、うって変わって最近のカバー曲です。去年のヒットナンバー、フロンティアで『未来の二人に』」

ソファで寝そべっていたひとりバネ仕掛けのように上体を起こした。

「俺、サイドギターのエレドア・マシスの大ファンなんだよ！」

曲が段々と盛り上がり、サビに入りかけたところで、

ヴィ——！！

アラートが鳴るや、パイロットたちはドアに向け駆け出す。外はMSハンガーになっている。3機のマラサイがベースジャバーとドッキングした状態で駐機されていた。

ベースジャバーは有人・無人飛行ともに可能な航空機である。メガ粒子砲を装備しているので戦闘爆撃機の使い方もできる。ホワイト・ウォールではベースジャバーは無人で運用している。

やがて、3機はスクランブル発進した。夜空に蒼白いスラスタール光が映える。

離陸後、旋回し北に進路を取る。

「ガス田プラントか!？」

「いや、北ルートのパイプラインだ」

隊長機からデータリンクされ、また地上のオペレーターから無線が届く。

「敵はプラントから北35キロ、河床にかかるパイプラインを破壊した模様。目撃した作業員によると、メンテナンス中に突如MSが出現、攻撃してきたとのこと。規模は一個小隊程度」

「了解した、急行する」

「緊急弁を閉鎖していますが、現場では火災が発生しています。ご注意を！」

眼下のプラントを通過し、3機はさらに北上する。亜音速のベース

ジャバーであれば、3分とかからない。

「各機、上空擦過しつつ散開。索敵しろ」

「了解」

「撃つ時は注意しろよ。いくら弁が閉まってるからって、パイプにはまだガスが……」

隊長がいいかけて、口を閉じる。正面に早くも炎の明かりが見えた。

「ひびい……」

僚機パイロットがうめく。

パイプラインは長さ数キロに渡って破壊され、連なった火炎はまるで、

「サ^火ラマン^かダー^げだ」

もうひとりのパイロットがつぶやく。

ぼんやりと水平飛行をしていた隊長は自身を叱咤させるように、フットペダルを踏み、操縦桿を倒しこむ。

「ぼやつとするな！ 警戒区域だぞ」

わずかに遅かった。

夜空を照らす二条のビームが味方のベースジャバーを貫通する。

「ゲリラふぜいがビーム兵器を使うのか!?!」

しかも、亜音速機を落とすほどの技量である。照準もよく調整されている。

全天周囲モニターにサイドミラー風に表示される火球となって墜ちるベースジャバーに、隊長は痛恨の思いだった。無人であったのがせめてもの救いだ。

2機のマラサイは四肢を振りつつ降下し地上を目指す。狙いを定めさせないよう、ジグザグのスラスタ光跡を描いていた。

「バルド、ラマン、一旦退くぞ！ 一撃加えてから回収する」

隊長のベースジャバーは横ロールしながら、機体下面のメガ粒子砲を旋回させる。

光学センサーが捉えたビームの軌跡を、コンピューターが分析、敵予想位置がはじき出された。

(火災の向こう？ 炎に隠れて狙撃か。こしやく！)

トリガーを絞る。ビームライフルよりも凶太いメガ粒子の奔流が火炎を切り裂く。続けざまの牽制射撃で着弾地点は、ガラスのきらめきを撒き散らしながら、砂柱が上がった。

旋回から切り込むように急降下する。正面下方に味方機のマークが映る。

「バルドっ!」

「やられました!」

悲鳴だった。

バルドのマラサイは砂漠に仰向けに倒れ、かたわらには不明機の姿。

「別働隊の待ち伏せ?」

敵MSはこちらに背を向け立っている。とつきにヘッド・アップ・ディスプレイのガン・レイトイクル照準を合わせる。

が、

(くそっ!)

射線上にはマラサイも重なっている。隊長はバルドが脱出したか確認できなかった。

わずかに回頭しこちらを見た敵機、—ゼー・ズールの頭部モノアイが光ったような気がした。

(ええい、ままよー!)

隊長はベースジャバードッキング・アウトから分離させながら叫ぶ。

「バルド、さっさと逃げろ!」

マラサイの左マニピュレータがシールドの裏からビームサーベルを抜く。

落下の勢いそのままにマラサイが光刃を叩きつけ、振り返りざまゼー・ズールは左腕ヒートクローで受け止める。着地の衝撃に砂漠が震える。

「袖付きネオ・ジオンか」

ゼー・ズールの袖の意匠が目に入り、隊長は忌々しげにつぶやく。ビームと電熱兵器の競り合い。飛び跳ねた融解金属が両機の装甲

を、かくぎ摺座したバルド機の装甲を小さくうがつ。

と、バルド機のコクピットハッチが開放された。

「バ、バカー！ まだそんなところに。今出たら、……」

火の玉のシャワーがコクピットに降り注ぎ、パイロットを焼き殺す……寸前でゼー・ズールが回りこみ、機体を盾にしてバルドを守る。

「なんだ？ くっ！」

疑問に思う暇はない。

振り上げたゼー・ズールの右腕からも、格納されていたヒートクローが飛び出す。左右のコンビネーションから繰り出される斬撃。

マラサイは後退しながら、ビームサーベルでしのぐ。怒れる灰色熊グリスリーのような猛攻のさなか、隊長は下方モニターの端にバルドが脱出する姿を捉えた。砂丘の陰に飛び込む。

「ライフルが無いなら」

マラサイは短いショート・バック・ステップ後ろ跳びで距離を取る。突進して猛追するかと思われたゼー・ズールは、意外にも左横跳びで逃げた。

「逃がさん！」

一度は射線を外されたが、機体を開くように右回頭したビームライフルが追っていく。HUDのレティクルにゼー・ズールのサイド・シルエットが入り込む、

刹那！

正面から再度二条の光軸が閃く。初撃でベースジャバーを撃墜した光と同じだった。ビームはマラサイの前方20メートルの砂漠に着弾。低い発射角のそれはガラスと熱砂の混合をマラサイに、どばつ、とぶちまけた。

「畜生！」

瞬間的にモニターが死んだこともあるが、なによりパイロットの心が折られた。マラサイはホバー走行で一挙に後退していた。

30分後。

ホワイト・ウォールの隊長が現場に戻ると、襲撃者の姿はどこにもなかった。

「遅いですよ、隊長。忘れられたかと思いましたよ」
「すまん。ラマンもゲルググ2機に追い回されてな」
バルドをマニピュレータに乗せ、コクピットに招きつつ隊長は思
う。

(ほつれた袖でも技は衰えず、か)

砂漠に落ちた赤熱爪ヒートクローの残骸が下方モニターに映っていた。

基地に戻った彼らは袖付きの襲撃以上に驚くこととなった。

ハシルメル・ガス田のパイプラインは全部で5ルート。

アルジェに向かう新しい北ルートのほか、ジブラルタル海峡へ通じ
る西ルート、ギニア湾へ通じる南ルート、地中海沿岸の都市ベニ・サー
フに至る北西ルート、そして、アフリカ大陸から地中海に飛び出すボ
ン岬半島に至る北東ルートである。

3機のマラサイがスクランブル発進した直後、西・北西・北東の三
つのルートも北ルート同様襲撃され、破壊された。

これはアフリカから南ヨーロッパに供給されるガスパイプライン
が、断たれたことを意味する。

*

翌日、ガルダーヤ地上街にて。

その日もアフリカは焼けるようだった。ブツホの面々はカフェの
一室で暑さをしのいでいた。

「マサイさん、なにか飲みますか？」

モシエがいう。

「いや、いいよ」

「そんな遠慮しないで」

「じゃ、バターミルクラベンをもらえるかい？」

「取ってくるね」

にっこりしながら、モシエは出て行った。

この場にはマサイ・ンガバもいた。

南の都市エルゴレアが民族解放戦線に制圧された後、しかも昨夜にはハシルメルのパイプラインが大規模テロにより破壊されたにも関わらず、マサイはすんなりとガルダーヤに入ることができた。この街を支配する欧州人軍事組織にとって、マサイの属するFLNは敵である。

すべて、ブツホとホワイト・ウォールのアジスらの手引きによるものだった。

「昨日はご苦労だった。西ルートは大分念入りに壊してくれたようだな」

「あんたたちのためにやったわけじゃない。あのガスはどうせヨーロッパ人に使われるのがほとんどだからさ」

「なるほど。そういう意味ではワタシが北西ルートを破壊したことは感謝されてしかるべき力」

西ルートはマサイらFLN、北西ルートはゲルクの攻撃により寸断されていた。ふたつのルートは地中海を渡ってスペインへ天然ガスを供給している。

「ジブラルタルも大騒ぎだろうな」

ゲルクがいう『ジブラルタル』とは海峡のことではない。宇宙への玄関口、マストドライバーを擁するアーティ・ジブラルタル、さらにはそれを管轄する宇宙引越し公社のことを指している。

残りの北東ルートはモシエのディジェとバロンのバージム、2機に破壊された。地中海に浮かぶサルデーニャ島やシチリア島を経て、イタリア半島にいたるパイプラインである。

モシエがグラスを持って戻る。

「ありがとう。ねえ、あんた……」

「はい？」

マサイに向け、モシエが小首をかしげている。伸ばしたもみあげが肩にかかっていた。

「前に会った事があるかい？　なんだか、あんたの顔を見ると、……ふしぎな気持ちがあるのだけれど」

モシエは首をさらに傾け、困った顔をした。

「ぼく、アフリカに来るの初めてですよ。お姐さんはエルサレムに来たことありますか？」

マサイが首を振る。笑った。

「他人の空似つてこともあるからね」

「遅くなつてすまない」

そのとき、新たな集団が部屋に入る。アジス・アジバラホワイト・ウォールの面々だ。

アジスを見たマサイの顔が明るくなる。

「ずいぶんかかったナ。連中を始末するのに、そんなに時間ガ……」
ゲルクがいかけて、口を閉じる。最後尾の黒いベールの人物が視界に入ったからだ。ムスリルの女性が着るニカブだった。目しか見えなない。

仏像に似たゲルクの鉄面、目の奥のスリットで光が奔^{はし}る。

「誰ダ？」

早くもナイフを抜いていた。

「落ち着いてくれ。武器は取り上げてある」

アジスはそういつて、ニカブへうなずいた。黒いベールを脱ぐ。現れる袖付きの軍服。

アヴリル・ゼックである。

「北のパイプラインをやレ、とはいつ々。連れて来い、といった覚えはない」

「知ってる。最後に『ネオ・ジオンを皆殺しにして、砂漠に埋めろ』ともいわれた」

空気が緊張した。マサイとモシエも席を立つ。

ゲルクはため息をつく。

「オマエたち、早速ネオ・ジオンと内通したのか？ どこまでも手癖が悪い連中ダ。元テイターンズが聞いて呆れル」

カチリ。

ゲルクの背中にふたつの拳銃が向けられる。モシエのK—38リボルヴァーと、今まで一言も発せず腕組みしていたバロン、彼が手にする短銃身のヴァルタPP8—Sである。

「宇宙に帰してやる、なんて約束しちゃったらしようがないでしょ」とモシエ。

「どういうつもりダ？ そんなことは知らない。袖付きテロリストとは交渉しない」とゲルク。

カチツ。

撃鉄ハンマーを起こすのとは、違う作動音がした。

『ああ、約束しよう、アヴリル中尉。確かに、他の連中は宇宙に帰ス。パラオのパンを食し、同じ袖に通した仲間ダ。神に誓おう』

バロンが手にしたレコーダーのスイッチを切る。

ブツホが袖付きの隠れ家アジトを包囲したとき、ゲルクがいった空手形からてがたをモシエは録音しておいた。これをホワイト・ウォールのアジスらにも伝えておいたのである。

ゲルクのセリフを信じるならば、彼女も元・袖付きということになる。バロンがいう。

「貴様が神を口にするのか？ 私は新参者だが、『傭兵は腕と信義だけを取り柄』じゃないのか？」

「誰からだったか、『人間だけが神を持つ』と聞いタ。ならば、肉体改造されすぎて人外に至ったワタシには、関係ないことダ。そう、『すべての神は死んだ』ヨ。」

フツ、信義だト？ そんなもの、野良イヌに食わしておけばいい
モシエが首を振る。

「そういう難しい話はいいです。ゲルクさん、吐いたツバ飲む気ですか？ そもそも会社の上は連中を処刑しろ、とは言つてないでしょう。独断専行ですか？」

そういえば、……アイスクリームをさんざん食べさせてくれたお礼がまだでしたね。弾でお返ししましょうか？」

「だったら、アイスで返せ。ワタシだって好きなんだ」

「その体じゃもう食べられないでしょうに」

「ゴ名答」

張りつめた沈黙が流れる。

唐突に、コロン、と金属音が床からして一触即発は終わりを告げる。「降参。嫌われたものダ。さすがに、コレだけの数を相手するのは無理だナ」

緑のガンダリウム・ブレードが転がっていた。

「しかし、オマエたち全員、逃走援助罪だゾ」

「パイプラインをさんざんぶっ壊した人がどの口でいうかな？」

ボソツとモシエがいう。先日、『戦車で人をひき殺すヤツがいうことカ』のお返しである。

「実はそのことなんだが、ちよつと相談が」

アジスがいう。

「下手すれば仲間を殺していたかもしれない。それにウホホワイト・ウォール ちはベースジャバーも墜とされて、いや、私がやったんだが、……とにかく大損だ」

マラサイの乗るベースジャバーを撃墜したのは、アジスと仲間のマイク、ふたりのハイザツクの仕業である。潜砂からビームランチャーの狙撃で姿を見られることもなかった。

「なにが良かったイ？ ソレ以前にFLNと内通していたオマエが、文句をいえる立場カ？」

「少しはこつちの言い分も聞いてくれよ！ 捕虜にしたペンプテイ、あいつメカニツクホホワイト・ウォール だろ？ こつちにくれよ。人手が足りないんだ。このままじゃ、オイラ過労死しちゃうよ」

空気と同化していたが、この場にはホホワイト・ウォールのメカニツク兼パイロットのヒンカピーもいる。

「できれば、あのゼー・ズールってMSとパイロットも一緒にな」とアジス。

「元ティターンズがネオ・ジオンの人員と装備を使ってナニがしたい？」とゲルク。

「天下の白壁だよ。アフリカじゃ誰も文句いわないって！」調子のいいことをいうヒンカピー。

「ゲルググもどきのネモなら、後ろ暗い仕事に使えるんじゃないですか？ ブツウツホチでもらいますよ」とモシエ。

「それはダメだ。ルオ商会のものはルオ商会に。元のところへ返すべきだ」とバロン。

混乱を収束するには、たっぷり二時間必要だった。

結局、アヴリルとゼー・ズール、そして偵察に出てガルダーヤ防衛隊に捕まったメカニックのペンプティは、ホワイト・ウォールが身請けすることになった。

「MSはどういいわけ、するんです？」とモシエ。

「鹵獲したことにすればいい」と苦い表情のアヴリル。

アジスは複雑な顔をする。かつての自分を見たような思いだった。

「アブリル中尉も、……ネオ・ジオンのイデオロギーを捨てたそうだ」
捕虜にされたクイントとパイロットのテツセラ・マツセラほか数名はゲルググもどきとともにFLNに合流する。

「もったいないなあ。OASにMSを売るだけでも大金になりますよ。考え直しましょうよ、ゲルクさん？」

「ルオ商会と事を構えたいの力、モシエ？ 夜にぐっすり眠りたかつたらFLNにくれてやったほうがいい。商会だって、OASやガスポートムと戦ってくれる組織とコネがもってメリットがあるんだ」

残りの袖付きメンバーはブツホが航宙チケットやら、偽造IDやらを用意して宇宙に上げる手はずとなった。

「なんだか、^{ブツ}^ホぼくらだけ骨折り損してません？」

「バカカ？ オマエらがワタシに銃を突きつけなければ、こんなコトにはならなかつた」

「うわー、そういうこという？ 元はといえば、ゲルクさんが空手形なんか切るから……」

「ジャパンには『損して得取れ』という言葉もある。私たちもずいぶんと徳を得たことだろう」

言い争うモシエとゲルク。バロンはひとり達観した顔をしてしきりにうなずいていた。

*

ハシルメルのパイプラインが破壊されたことで、ガス供給はタンクローリーでの陸上輸送に頼らざるをえなくなった。なぜか事態を予測していたかのように、ルオ商会はパイプラインの権利を売却していた。その上、北アフリカのローリーを買い占めていた商会は大きな利益を得る。

また連邦政府はガス田プラントの警備が不十分だとして、P M S Cへの予算を大幅に増やして計上する。ホワイト・ウォールだけでなく、正式にブツホ・セキュリティ・サービスも食い込める結果となった。

あるプルの逆行夢

袖付きの捕虜はすみやかに宇宙に上げる、はずだった。
思わぬ事態になった。

ガス・パイプライン襲撃事件から人心動揺が起こり、出宙を予定していた人々がアーティ・ジブラルタル宇宙港に殺到した。アルジェリアにいるゲルクたちも当然、ジブラルタルを使うつもりでいたが、壮絶なラツシユを起こし宇宙へのチケットを確保できなくなった。

「じゃ、ニュー・ホンコンに行きますか？」

「別の宇宙港を使うのは構わんが、ホンコンまでの航空チケットはオマエが払うんだナ、モシエ？ 無論、捕虜も含めた全員分ダ」

モシエは口を閉じる。

また、ガス田・ハシルメル^Bの警備をブツホ・セキュリティ・サービス^Sの一部受け持つことになり、ゲルクたちも駆り出されることになった。

瞬く間に一ヶ月が過ぎ、彼らは神の子が生まれた日をアフリカで迎えることになった。

UC・0097年、12月。アルジェリア中部、ガルダーヤ地上街。すっかり常連となったブツホの面々がカフェの店主を追い出し、占拠し、クリスマスを祝う。

まずそうにビールを飲んでいたモシエは、突然立ち上がり、
「ぼく、お風呂入ります！」

服を脱ぎ始めた。目が、とろん、としている。

シャツを投げ捨て、最後のトランク스에手をかけたところで、バロンが止めた。

「落ち着け……」

「そうダ。これでも飲メ」

かぶせるようにいったゲルクが、さつ、とグラスを差し出す。氷の浮いた茶褐色のそれは、いい感じで水滴の汗をかき、ぼう、としたモ

シエは、

「なにこれー？ おいしそー」

無防備に喉を鳴らした。

「コーヒー牛乳だあ」

一息に飲み干す。

「あれ？ この天井、回ってる？」

そのまま後ろにひっくり返った。気を失っている。

「なにを飲ませた？」

「タダのカルーア・ミルクダ」

バロンはため息しつつ、倒れたモシエを引き上げる。テーブルに突っ伏す形にしてやると、右上腕のタトウーに気づいた。

(……0^{ゼロ}?)

数字のようだが、はつきりとしない。なぜなら、

「ホウ。コイツはひどいやケドダ」

向かいのゲルクもいう。

モシエの右上腕筋から三角筋にかけて、ひどい火傷の痕で皮膚がぐずぐずになっていた。

「ワタシもこんなサイボーグになる前は腕といわず、脚といわずヤケドだらけだった」

バロンがきく。

「どうしたんだ？」

「どうしたか？ ソレは……おかしイ、メモリーエラー記憶障害ダ。データベース内部記憶を引き出せない。

しかたもあるまい。ワタシはインダストリアル7沖会戦で3時間も宇宙漂流したのだから」

「……酸素欠乏症か？」

「そうダ。医者の話ではもう脳の一部が死んでいたらしい。側頭葉は人工大腦が埋め込まれている。思い出せないというより、そもそも記憶がないのかナ」

ゲルクの記憶に、『全身の火傷の痕^{あと}』という道標はある。だが、その先は断崖絶壁になっていた。

「しかし、覚えていることもあるんだヨ。ヤケドを負わせた連中をひどく恨んでいて、殺しても飽き足らないと、思っていたらしい。記憶ともいえない断片だけド、ワタシの体を焼きながら、そいつらは笑っていたんだヨ」

いつしか、宴の喧騒も冷めた。

カフェには物憂げな裸電球の光の下、テーブルに突っ伏したモシエ、そして、横で黙然とウイスキーをなめるバロンしかない。

「ん……」

「起きたか」

「あれ、ぼく、寝てた？」

モシエが身を起こした拍子に、かけられていたシャツが床に落ちる。腕の火傷が否が応でもバロンの視界に入った。

「……アハハ、……昔、ちよつと、ね」

モシエは笑う。

「いや、別に」

バロンは「興味ない」と、目を手元のグラスに戻した。氷がコロんと音を立てる。

モシエの頬に酔いとは違う朱がさした。

「ねえ、バロンさん知ってる？」

思わずバロンはまた顔を向けた。下着一枚のモシエがすぐ横ににじり寄っていた。

「昔、ジャパンでは罪人の腕にタトウーを入れたんだって。咎人^{とがにん}つてわかるように、さ」

「コリアでも顔に焼きゴテを当てられたりしたらしいな。どこの国も似たようなものだ」

「そうだね。はあ、……」

「っ！ おい」

モシエは頭をバロンの肩にしだれかけた。

「昔のことタトウーみたいに、消せたらイイなあ……。はあ、……ゲルクさんは覚えてないんだって。イイなあ……」

「……」

そのまま、再び眠ってしまった。モシエの黒髪から立ち上る甘い匂いに、なんともいえない感情を抱きかけ、バロンは首を振った。

モシエの体をテーブルに戻し、落ちたシャツをかけてやろうとしたバロンは、はつ、とした。アルコールで血流がよくなったためか、普段は隠れている【消したはずのタトゥー】が現れている。

なにか紋章のような図形と、文字列であった。

(pr……d……ced? by Neo……Ze……!)

失われたアルファベットを補完し、戦慄する。

Produced by Neo Zeon
(ネオ・ジオン製!? なぜこんな……)

人間に彫り込むべき字面ではない。意思を持たぬ物、MSなど機械に授けるべき印しである。

ならばモシエは、

(無理やり入れさせられた? だから、焼いて消した、のか?)

判然としなかった図形は、亡霊のようにネオ・ジオンの紋章として浮き出していた。

*

7ヶ月前。

UC・0097年、5月。地球と月のラグランジュ点L5のサイド1。ブツホ・コロニー。

最終面接は社長のマイツツアー・ロナが立ち会った。

これは何事も他人任せを嫌う父、シャルンホルスト・ロナの影響もある。が、マイツツアーがブツホ・グループ内では新参の民間軍事警備部門に並々ならぬ期待を寄せている証しでもあった。

マイツツアーがいう。

「来年、ジュピトリスの帰還に合わせて警護モビルスーツ隊を再編成する。これは連邦の新たな軍事計画にブツホが一枚噛んだこともあるが、裏には違う意味がある。

君はそのMS部隊を率い、実戦データの蓄積を行ってほしい。今は

まだその時ではないので詳しく話すことはできないが……。表向き編成する部隊は、対ネオ・ジオン残党掃討が主任務だが真の目的、それは世界に新しい秩序をもたらす、なんと言おうか、

そう！ ^{バンガード}尖兵を担っている。

同時に、君にはフィルターとしての役割をしてもらいたい。自浄能力を有しない組織は連邦であれジオンであれ、いずれ腐っていくことは明白だ。それは人類の歴史が証明している。

結果的に君自身が汚れていくこともある。だが、それで目指す理想が近づくのならやる価値はあると、思わないか？」

そこで初めてモシエは反問した。

「自分の理想と社の理想が合致したものでしょうか、分かりかねますが」「リジョン、君はこの世界をどう考えている？ 宇宙にまで人の生活圏が膨れ、ゴミを垂れ流す状況を」

「腐敗していると思います。『地球連邦政府が腐っている』とよく耳にしますが、裏で連邦とつながり茶番を演じている共和国やネオ・ジオンも同じ穴のムジナです」

「ほう、バツサリ斬り捨てたな」

「度重なる戦禍による環境破壊、それでも増え続ける人口。もはや状況は連邦の絶対民主制では進まないところまで来ているのです。かといって、ボンクラの独裁は破滅しか招きません」

「ザビ家はボンクラか？」

「そこまで、直接的に言っているわけでは……。しかし、はい、そう思います」

マイツツアアは愉快そうだった。

「続けてくれ」

「はい。自他を律し、高貴な理想を追い求められる人間だけが、この世界を変えていけると思っています。民主主義は聞こえは良いですが、『皆仲良く、責任者不在』です。今必要なのは、強力なカリスマ性を持った英雄による衆議独裁です」

「なるほど。では、シャアはどうか？ 彼はボンクラではあるまい」

「シャアの理想は高いのではなく、狂っていたのです。彼は人の

可能性ニュータイプ性を否定しながらどこかで捨てきれず、すがっていました。そんな右も左も分からない思想に人類の未来をたくせるほど、世界はバクチ好きではないのです。アクシズなど落とさずとも彼自身が道を示し、人類を導くべきでした」

「確かダカールで演説したのは、シヤアだったかな？ 彼は『地球を人の手で汚すな』『人類を地球から巢立たせる時が来た』と言った。あれは道を示したのではないか？」

「訂正します。寿命のすべてを賭け、道を示し続けるべきでした。一度や二度の挫折で何もかもリセットさせようとする人間など、ボンクラ以下です」

「若者の傲慢ごうまんを聞いていると、老人には心地よいな」

柔和な笑みを浮かべるマイツツアーはまだ老齢に達していない。一転、眼光鋭く切り込む。

「しかし、会社が雇いたいのは英雄でも独裁者でもない。グループ内の監視者フィルダーでありMSパイロットだ。

仮定の話は好きではない。だがあえてきこう。もしも強力なMS、……例えばガンダムを与えたらジユピトリス隊のエースパイロットが駆るキュベレイや、かつて『四枚羽根』と呼ばれた袖付きのMSに、君は勝てるかね？」

確信した。この男は過去を知っている。その上で試している。

「今のぼくには無理です」

マイツツアーは明らかに落胆した。さすがに、『ぼく』はまずかったか。

「面白い物言いだ。では、いつの君なら勝てる？」

意地の悪い人だ。しょうがない。

「……8年前の私ならツアーや、ましてトウエルヴごときに遅れは取らない。いつでも、戻る覚悟があります」

打って変わった我の強いセリフにマイツツアー・ロナは満足した。「では試してみよう！ 合格だ、モシエ・リジョン。BSSは君が能力を十全に発揮することを期待する。姉をMS隊隊長の座から降ろして見せたまえ！」

翌月。

モシエとゲルクは発足した、BSS緊急アドバイザーに任じられた。

4年前。

UC・0093年、10月。サイド1のコロニー、ロンデニオン。ブツホ・コンツェルン職業訓練校。

「はじめまして！ モシエ・リジョンです。アストライヤ孤児院から来ました。

特技は短距離走と機械いじりです。苦手なものは……甘いもの、かな？ 特に、ごてごてしたチョコパフェとかありえない。

あつ！ でも女の子の甘くいキスは大好きですよ♪」

スクール・カースト校内上下関係が微妙な入学初日の自己紹介。同級生はモシエが放った最後の一言で、

(この人はエロキヤラ確定だね)

決め付けられた。

しかし、充実した三年間を過ごす。

モシエは卒業後、横滑りでグループ企業のブツホ・ジャンクに入社した。同社に6ヶ月を勤め、BSSの幹部社員試験を受けることを決意する。

7年前。

UC・0090年、10月。イスラエル、エルサレム。

反連邦・イスラム原理主義の女がテロを起こす。最大効果を狙い、混雑するショッピングモールの真ん中で自爆した。

レスキュー隊員はガレキまみれの子供を見つける。小柄だ。ティーンエイジャーになるか、ならないかぐらいだろう。

その子は死体に取りすがっていた。父親なのか。

「さあ、早くこっちに！」

返答を待たずに、抱きかかえ生き地獄を脱出する。救急車へ向かう途中、子供の手からスクール・パスが落ちた。拾い上げ、レスキュー

が励ます。

「辛いだろうけど、しっかり生きなきゃ！ モシエ・リジョンくん、お父さんの分まで頑張るんだよ！」

名無しの浮浪児が再び名を与えられた瞬間だった。

レスキュー隊員は知らない。

本当のモシエ・リジョンは父親から、2メートル離れたガレキに埋まっていることを。

本当のモシエ・リジョンは黒髪だが、その子の髪は違う色をしていることを。

白でも黒でもない灰色の世界が覆い隠した。

天涯孤独のモシエは、アストラライア財団が運営する孤児院に引き取られた。

およそ8年前。

UC・0090年、1月。タイ、バンコク、ある地下医院。

「本当にいいのかい？ 君の齢とで全摘出したら、もう……」

「いいんだ。この姿を鏡で見るのはもうイヤだ」

「分かったよ。じゃあさ、……幼女の卒業記念におじさんを楽しませてくれないかな？」

その闇医者からは心の腐臭が漂っていた。栗毛の少女は一晚、男に夢を見させてやった。

クスクスクス……♪

ひざまずき、男のモノをくわえ込んだ少女―モシエの前身を、死後の沼から浮かび上がった何者かが嗤っていた。

ひとり、ふたりではない。

エイト・シスターズ

八姉妹。男に奉仕を強制されるモシエと、左目を除けば、鏡映しの少女たちであった。すでに、モシエは隻眼だった。

同じ似姿をしたクローンだが、モシエは連中のおいを嗅ぎ分けられた。

特に、ひとりの少女に覚えがあった。

(かわいいでしょ)

その栗毛が笑いながらいう。

モシエが一物を口から離すと、闇医者 of 姿はかき消えていた。

「いや、醜いよ」

舌なめずりし、モシエが嘲った。

確かに醜い。

少女の左目の上に直径10ミリぐらいの弾痕が開いていた。ふしぎに血は出ない。代わりに穴から太い蛆虫がよろよろと這い出た。グロテスクなことに少女と同じ顔をしていた。

蛆虫がわめく。

(誰のせいでもうなったと思ってるの!? あんたでしょ、外れモン！
ファイヴも、セヴンも、みんなあんたのせいで死んじゃったんだ。
あんたがあの時……)

「ギャーギャーと、うるさいんだよ」

モシエは冷笑した。

「なにが私のせいだ。君たちはザコだから死んだんだ。死んでまで汚い顔を見せるな」

(嫌なコ……)

(わたしよ、死ね！)

(あなたこそ消えちやいなよ！)

口々にモシエをのしりながら、少女たちは虚無に飲まれていった。

*

現在。

UC・0097年、12月。ガルダーヤ地上街、ホテル・クラマ。

モシエ・リジョンは目覚めた。

喉はひどく乾いている。嚥下した唾液はぬめっていた。

(まるでアレみたいだ)

夢の中で強要された性欲処理のようだった。

気持ち悪いと分かっているけど、命じられれば受け入れてしまう。受け入れることで精神的安定を得られる。

(やっぱり、ドMなのかな?)

声もなく笑った。間違いに気づいたから。

それはプログラミングされたものだから。自分の意思ではどうしようもない、と気づいたから。

(でも、今は主^{マスター}がいてくださる)

枕元に置いた聖書を手に取る。古く、使い込まれ表紙はぼろぼろだ。

(誰もぼくに命令できない。主だけだ。でも、主は滅多に命じられない。道を示すだけ)

今夏、東南アジア・ラオスでの仕事の後、昔世話になった闇医者と会った。再会を喜び、夕食を共にしそのままダブルベッドにチエツクインした。

「連れに逃げられちゃったみたい」

翌朝、モシエはホテルのフロントで舌を出す。

肝心の連れ、闇医者は

(とつづくに土に還ったろうな。ぼくのことチクったの、あいつだな多分。マイツツアーさんもやり手だよ)

昨晚、飲まされたカルーアが効いたのだろう。だから、久しぶりにあの夢も見た。

立ち上がったモシエはバスルームに行き、鏡の前のミネラルウォーターに口をつける。ボトルの横にはカラーコンタクトのケースが置かれていた。

洗面台でモシエは、2つの義眼を外す。しばらくうつむいていたが、決意し顔を上げた。鏡を見る。

つぶれた左目は、サーモンピンクの結膜を見せている。

だが、黒のコンタクトを外した右目は深く、蒼い。まるで海底のようだった。

「あれ?」

鏡をのぞき込み、肩まで伸びたもみあげをかき上げる。黒髪の根元

がオレンジの栗色に変わりつつあった。

「また染め直さなきや。バレたらゲルクさんに殺されちゃうよ」

染色を済ませたモシエはベットに戻る。

(そういえば、バロンさんが連れてきてくれたのかな?)

自分の足で部屋に帰った記憶はない。

(なんだか、キウンキウンする……)

モシエは胸をおさえる。

もしも、健全な女のままだったならば、彼と……。だが、後戻りはできない。人生は絶対にやり直せない。

時として、性の喪失にモシエの心臓はくつぽりと空洞になってしまったかのような、虚無感に襲われる。

(それでも、……昔の姿、あの娘の顔を見るよりむしろ)

モシエはブリーフケースから社内秘資料シークレットを出す。ジュピトリス警護MS隊のエアスパイロット、マリア・アーシタの顔写真を見る。彼女の碧眼はモシエの右目と同じ色である。

写真を握りつぶす。クシヤクシヤになったそれを広げ、今度はバラバラに引きちぎり、床にぶちまけた。

第一次ネオ・ジオン戦争末期に感じた怪物的殺人願望、それがモシエの髓ずいから黄泉よみがえ帰ろうとしていた。

だが、当人はその無意識には気づかず、ただひとつの救いであるかのように、聖書を胸に抱いていた。

予定では大型宇宙輸送艦ジュピトリスはヘリウム採取作業を終え、来年U.C. 0098年3月に木星を発し、何事もなければおよそ3ヶ月後、地球圏に帰還する。

その船には、ゲルクとモシエが殺したくてやまない強化人間がいた。かつてネオ・ジオンではプルツールと呼ばれ、今はマリア・アーシタと名を変えたMSパイロットである。

*

一章

U C .

0 0

9 7

） 終

）